

|       |          |      |         |
|-------|----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教育原論（前期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|----------|------|---------|

|   |  |      |                     |      |  |
|---|--|------|---------------------|------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 教育の対象は人間であり、人間に限られる。動物は人間に訓練されることがあるが、それは人間による動物の家畜化、すなわち「手段化」にほかならない。動物の飼育や植物の栽培とは異なる教育の本質と目的について、教育哲学の視点から考察を加え、理解を深めることを目的とする。  |      |                     |      |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 教育原論は、成長・発展する人間の本質と遺伝や環境との関係を総合的に考察し、教育の必然性と可能性について考える。また教育行為を規定する人間観についての歴史的考察や、代表的な考え方を取り上げての比較的考察をする。現行の教育を規定している目的や目標について吟味し、目的概念と教育実践との関係について考える。   |      |                     |      |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | <table border="1"> <tr> <td>テキスト</td> <td>名倉英三郎編『新制教育原理』八千代出版</td> </tr> <tr> <td>参考文献</td> <td> A. ポルトマン著『人間はどこまで動物か』岩波新書（高木正孝訳）<br/> J. J. ルソー著『エミール』岩波文庫（今野一雄訳）<br/> J. A. コメニウス著『大教授学』明治図書（鈴木秀勇訳）<br/> J. デューイ著『民主主義と教育』岩波文庫（松野安男訳） </td> </tr> </table> | テキスト | 名倉英三郎編『新制教育原理』八千代出版 | 参考文献 | A. ポルトマン著『人間はどこまで動物か』岩波新書（高木正孝訳）<br>J. J. ルソー著『エミール』岩波文庫（今野一雄訳）<br>J. A. コメニウス著『大教授学』明治図書（鈴木秀勇訳）<br>J. デューイ著『民主主義と教育』岩波文庫（松野安男訳） |
| テキスト  | 名倉英三郎編『新制教育原理』八千代出版  |      |                     |      |  |
| 参考文献  | A. ポルトマン著『人間はどこまで動物か』岩波新書（高木正孝訳）<br>J. J. ルソー著『エミール』岩波文庫（今野一雄訳）<br>J. A. コメニウス著『大教授学』明治図書（鈴木秀勇訳）<br>J. デューイ著『民主主義と教育』岩波文庫（松野安男訳）   |      |                     |      |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 評価は定期試験の成績によっておこなう。  |      |                     |      |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 講義に出席することが大前提である。それに加え、自ら考え、ノートを取り、不明な点は調べたり質問するように努力すること。   |      |                     |      |  |

1. - (1)人間の基本的性質について
2. (2)子どもと親（大人）
3. (3)人生のライフサイクルの中での人間形成
4. (4)遺伝（素質）説における教育
5. (5)遺伝（経験）説における教育
6. (6)遺伝と環境の相互的關係
7. (7)学校の「社会化」と社会の「学校化」
8. - (1)教育の理想や理念を規定するもの
9. (2)教育目的の諸要因（社会、文化、子ども）
10. (3)わが国の教育目的
11. (4)学校の教育目的の課題
12. (5)教育実践における目的意識的思考の役割

|       |          |      |         |
|-------|----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教育原論（後期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|----------|------|---------|

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 教育原論 は、教育の本質や目的についての理解を前提として、意図的教育としての学校教育についての基本的理解を培うために、教育内容と教育方法についての理解を深めることを目指す。           |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 教育原論 は、「教える」と「学ぶ」ことを媒介する教育内容を規定する条件や「教授・学習活動」を導く方法原理について考察する。また学級教授法の変遷について概観しながら、授業とは何かについて考える。 |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | 名倉英三郎編『新制教育原理』 八千代出版                           |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | 『教育の過程』 J. S. ブルーナー著 岩波書店<br>『学習指導論』 吉田 昇著 学文社 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 評価は定期試験の成績によっておこなう。  |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 講義に出席することが大前提である。それに加えて自ら考え、ノートを取り、不明な点は質問すること。  |  |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. (1)教育内容の存在理由
2. (2)陶冶材としての文化と経験
3. (3)教育内容の組織化の原理
4. (4)わが国の教育課程
5. (5)教育課程の運営と課題
6. (6)教育課程政策の変遷
7. (1)教育方法とは何か
8. (2)教授・学習の原理
9. (3)現代学習指導論の特色
10. (4)学習指導の実際
11. (5)学級観の変遷と教育方法の改革
12. (6)教授・学習過程と評価

|       |          |      |       |
|-------|----------|------|-------|
| 科 目 名 | 教育原論（前期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|----------|------|-------|

|                       |   |   |  |
|-----------------------|---|---|--|
| 講 義 の 目 標             | 教育の基本的概念や考え方を学ぶとともに、教育観を様々な角度から鍛えることを目的とする。   |   |  |
| 講 義 概 要               | 子どもの権利条約を素材にして、人権と子どもの権利、能力の問題、義務教育等の基本的な概念や考え方を学ぶとともに、教育と学習との関係を様々な角度から考えていく。同時に授業と並行して、障害者と教育との関係を扱った文献を読みながら、人間観を問いなおすものとする。 |   |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・川村他『新 教育を考えるための8章(仮題)』(川島書店)</li> <li>・レポート用：斉藤茂男『生命かがやく日のために』(講談社文庫)</li> </ul>  |  |
|                       | 参 考 文 献   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・堀尾輝久『教育入門』(岩波新書)</li> <li>・堀尾輝久『教育基本法はどこへ』(有斐閣新書)</li> <li>・『子どもの権利条約 実践ハンドブック』(旬報社)</li> <li>・里見実『働くことと学ぶこと』(太郎次郎社)</li> </ul> |  |
| 評 価 方 法               | 授業中の二回の試験によって行う。<br>ともに随時課されるレポートを参考にする。  |   |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 討議を多く取り入れるつもりなので、積極的に参加されたい。  |   |  |

1. 講義の進め方の説明 / 連休明け提出のレポートの説明
2. 子供の権利条約を考える (1) 私たちの「子どもの権利宣言」の作成
3. 子供の権利条約を考える (2) 子どもの人権と子どもの権利
4. 子供の権利条約を考える (3) 「能力に応じ」た教育とは何か
5. 子供の権利条約を考える (4) 義務教育と学習権、参加権
6. 試験
7. 復習
8. 学ぶとはどういうことか (1) わかるということ
9. 学ぶとはどういうことか (2) 学びと労働
10. 学ぶとはどういうことか (3) 教えることと学ぶこと
11. 学ぶとはどういうことか (4) 評価のあり方について
12. 試験

|       |          |      |       |
|-------|----------|------|-------|
| 科 目 名 | 教育原論（後期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|----------|------|-------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 日本の教育の歴史を学び、基礎的な知識を獲得することによって、現代社会の教育を見る目を養うことを目的とする。 |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 江戸時代以降現代までの日本の教育の歴史を講義する。                             |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | ・石島他『日本民衆教育史』（粹出版）   |  |
|   | 参考文献  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大田堯『戦後日本教育史』（岩波書店・品切れ中）</li> <li>・寺崎他『近代日本教育の記録』（全三巻、日本放送協会出版、品切れ中）</li> <li>・堀尾輝久『現代社会と教育』（岩波新書）</li> </ul> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 最後の授業時の試験によって行う。<br>ともに随時課されるレポートを参考にする。              |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 討議を多く取り入れるつもりなので、積極的に参加されたい。                          |  |  |

1. 講義の進め方の説明 / 教育史とは何か / 時代区分論
2. 江戸時代の教育 (1) 二つの教養・二つの教育
3. 江戸時代の教育 (2) 教育諸機関と子育て
4. 近代学校制度の成立 「学制」から小学校令まで
5. 大正新教育 児童中心主義の教育と新しい学校
6. 戦前期の教育 生活綴方教育
7. 戦争と教育 『戦ふ少國民』に見る戦時下の教育
8. 戦後教育改革 (1) 教育刷新委員会と教育基本法
9. 戦後教育改革 (2) 『学習指導要領 (試案)』とコア・カリキュラム
10. 「逆コース」下の教育 (1) 朝鮮戦争と占領方針の転換
11. 「逆コース」下の教育 (2) 勤務評定と学力テスト・教育「正常化」
12. 試験

|       |           |      |      |
|-------|-----------|------|------|
| 科 目 名 | 教職心理学（前期） | 担当者名 | 瀧本孝雄 |
|-------|-----------|------|------|

|             |  |                             |  |
|-------------|--|-----------------------------|--|
| 講義の目標       | [教職心理学]では教職に必要な心理学的な基本問題について講義する。前半では主に教育心理学およびカウンセリングと心理テストについて、後半では主に青年心理学の領域について考察する。                             |                             |  |
| 講義概要        | [教職心理学]<br>教育心理学の対象と方法、カウンセリングの目的と方法、心理テストの理論と実施、学習・知能、記憶・思考、教育の評価と測定、教師の資質とリーダーシップ、青年心理学の対象と方法、青年期の意義と特徴などについて講義する。 |                             |  |
| 使用教材        | テキスト   | 『カウンセリングと心理テスト』林 潔他著 プレーン出版 |  |
|             | 参考文献   |                             |  |
| 評価方法        | 評価方法は講義、実習に関する小テストとレポートとする。<br>出欠席は毎回とる。   |                             |  |
| 受講者に対する要望など | [教職心理学]は前期授業で必修であり、[教職心理学]は後期授業で選択であるが、[教職心理学]も受講することが望ましい。  |                             |  |

1. 教育心理学の対象と方法  
教育心理学とは何か、教育心理学で扱う問題について講義する。
2. カウンセリングと生徒相談の目的  
教育におけるカウンセリングと生徒相談の意義について考察する。
3. カウンセリングの方法  
カウンセリングの方法について具体的な例をもとに講義する。
4. クライアント中心カウンセリング  
クライアント中心カウンセリングの目的と方法について講義し、基本的な実習を行う。
5. 心理テストの理論  
心理テストの中で、知能テスト、性格テストの理論と種類について講義する。
6. 心理テストの実施  
性格テストを実際に実施し、自己理解を深める。
7. 学習・知能について  
教育における学習・知能の意義とその役割について講義する。
8. 記憶・思考について  
教育における記憶・思考についてその意義と役割について講義する。
9. 教育の評価と測定  
教育評価の意義とその問題点を具体的事例をもとに講義する。
10. 教師の資質とリーダーシップ  
望ましい教師のあり方、教師の資質について検討する。
11. 青年心理学の対象と方法  
青年心理学とは何か、青年心理学で扱う問題について講義する。
12. 青年期の意義と特徴  
人生サイクルの中での青年期の意義とその特徴について講義する。

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教職心理学（後期） | 担当者名 | 瀧 本 孝 雄 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>[ 教職心理学 ] では [ 教職心理学 ] をふまえたうえで、その応用的な側面について考察する。さらに、カウンセリングの各種のトレーニングを実施し、人間理解、生徒理解を深める。</p>                               |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>[ 教職心理学 ]<br/>現代青年の特徴、 青少年国際比較調査結果の概要、 現代青年の悩み、 青年期の人間関係、 生徒の問題行動、 生徒の精神衛生、 性差心理学などについて講義する。またグループ討議やカウンセリングの実習なども実施する。</p> |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   |  |  |
|   | 参考文献   |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>評価方法は講義、実習に関する小テストとレポートとする。<br/>出欠席は毎回とる。</p>   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>教師志望者は「教職心理学」も受講することが望ましい。</p>  |  |  |

|                            |   |
|----------------------------|---|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <p>1. 現代青年の特徴(1)<br/>現代青年が以前の青年と比べてどのような特徴があるかを考察する。</p> <p>2. 現代青年の特徴(2)<br/>同 上</p> <p>3. 青少年国際比較調査結果<br/>世界11ヶ国の青年の中で日本の青年の特徴について概説する。</p> <p>4. 現代青年の悩み<br/>現代青年の悩みを構造的に理解する。</p> <p>5. 青年期の人間関係<br/>青年期の友人関係、親子関係、恋愛、性の諸問題について検討する。</p> <p>6. 生徒の問題行動<br/>非行、いじめ、登校拒否など現在学校で問題になっている行動について講義する。</p> <p>7. 生徒の精神衛生<br/>神経症、精神病、自殺などについて考察する。</p> <p>8. 性差心理学(1)<br/>男性と女性の身体的・精神的な差異について考察する。</p> <p>9. 性差心理学(2)<br/>同 上</p> <p>10. グループ討議<br/>現在の中学、高校での諸問題についてグループに分かれて討議する。</p> <p>11. カウンセリングの実習(1)<br/>カウンセリングの基本的実習を行う。</p> <p>12. カウンセリングの実習(2)<br/>カウンセリングの各種の技法についての実習を行う。</p> |
|----------------------------|---|

|       |           |      |      |
|-------|-----------|------|------|
| 科 目 名 | 教職心理学（前期） | 担当者名 | 鈴木乙史 |
|-------|-----------|------|------|

|             |   |                   |  |
|-------------|---|-------------------|--|
| 講義の目標       | <p>教職に就く者として、児童・生徒の理解は欠かすことのできないことである。<br/>         発達のプロセス、学習のメカニズム、比較文化的観点にたった理解等を講義する。</p> |                   |  |
| 講義概要        | <p>主として講義をおこなう。</p>   |                   |  |
| 使用教材        | テキスト  | <p>特になし。</p>      |  |
|             | 参考文献  | <p>講義の中で指示する。</p> |  |
| 評価方法        | <p>テストによる。</p>  |                   |  |
| 受講者に対する要望など |   |                   |  |

1. オリエンテーション
2. 発達 気質・愛着
3. 発達 マターナル・ディプリベーション研究
4. 発達 自律性
5. 発達 自己意識と自我同一性
6. 発達 ライフサイクル論
7. 学習 無学習性行動と学習性行動
8. 学習 学習のメカニズム(1)
9. 学習 学習のメカニズム(2)
10. 学習 教授 - 学習過程
11. 知能 - 新しい知能観
12. まとめ

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教職心理学（後期） | 担当者名 | 鈴 木 乙 史 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |   |                   |  |
|---|---|-------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>教職に就く者として、児童・生徒の理解は欠かすことのできないことである。<br/>生徒指導やカウンセリングの方法等を講義する。</p> |                   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>多くの実習を含めながら講義をすすめる。</p>  |                   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | <p>特になし。</p>      |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <p>講義の中で指示する。</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>出席、課題の達成度、レポートの評価でおこなう。</p>  |                   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>多くの課題を出すので、きちんと出席できる学生のみに参加してほしい。</p>                              |                   |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. オリエンテーション
2. 精神障害 児童期・青年期
3. 精神障害 精神病圏
4. 精神障害 神経症圏
5. 精神障害 不登校といじめ
6. 自己理解と他者理解
7. 自己理解と他者理解
8. 自己理解と他者理解
9. コミュニケーション 日常の会話
10. コミュニケーション カウンセリングの基礎
11. コミュニケーション カウンセリングの応用
12. まとめ

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教職心理学（前期） | 担当者名 | 横 田 雅 弘 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>教職心理学 では、実際に教職についたときに役立つ心理学の実践的知識ならびに教職試験に必要な知識の概略を身につけることを目的とする。ただし、学生には、単に知識を暗記するのではなく、それらの知識を通して教職という仕事についての自分なりの考え方を確立してほしい。</p>  |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>教職心理学 は講義中心の授業であるが、教職についたときに必要となる心理学の知識をこのような短期間に網羅することは不可能である。そこで、ここでは主に人間関係にポイントを絞り、子供の社会性の発達や青年の心理、あるいは学校不適應の問題などを扱う。できるだけ身近な例をもとに、教職の立場からだけでなく、将来受講者が親になったときの立場からも役立つ知識を提供する。</p> |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | <p>テキストは用いないが、必要に応じてプリントを配布する。</p>                                   |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | <p>教職試験の準備のためには、この授業でカバーしきれないところを整理しておく必要がある。授業の中で参考文献のリストを配布する。</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>評価は最終の試験をもとに行う。試験は持ち込み不可の記述式で、熱心に授業に出席していなければよい評価は困難な問題である。</p>   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>将来教師になると決めている人も決めていない人もいると思うが、いずれにしても人間教育を重要視する熱心な学生の受講を期待する。全回出席を原則とする。</p>  |  |  |

1. オリエンテーション
2. 発達と教育：発達観と教育、認知的発達、道徳性の発達、知能の発達と創造性
3. 人間関係と社会性の発達(1)：親の養育態度と子供のパーソナリティ
4. 人間関係と社会性の発達(2)：学級集団のダイナミクス（友人関係、教師生徒関係など）
5. 学習指導と教育評価(1)：学習理論、動機づけ、教育評価など
6. 学習指導と教育評価(2)：上記テーマの続き
7. 青年期の身体成熟と心理特性(1)
8. 青年期の身体成熟と心理特性(2)
9. 学校不応と精神衛生(1)：登校拒否、暴力、いじめなど
10. 学校不応と精神衛生(2)：カウンセリングの基礎知識
11. 学校不応と精神衛生(3)：上記テーマの続き
12. 前期末テスト

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教職心理学（後期） | 担当者名 | 横 田 雅 弘 |
|-------|-----------|------|---------|

|                       |   |   |  |
|-----------------------|---|---|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>教職心理学 では、自分を知るということを目的とする。特に初等・中等教育の教師は子供たちと全人格的に交わるのであり、そのときに自分が教師として、あるいは人間としてどのような特性をもっているのか、どのような教師になりたいと思っているのか、そのために自分のどこを生かし、どこをよりのばしていかなければならないかを知っていることは重要である。授業はこの自分理解の手助けを行う。</p> |   |  |
| 講 義 概 要               | <p>教職心理学 では、講義は最小限にとどめ、学生が自己分析にチャレンジする。授業は、心理テストとそれを理解するための交流分析の理論講義、ゲーム、ディスカッション等を中心に展開する。第2回授業で心理テストを行うので、受講希望者は必ず出席すること。</p>   |   |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | <p>テキストは用いない。ただし、心理テストの実費として700円が必要</p> |  |
|                       | 参 考 文 献   | <p>交流分析についての参考文献を授業中に示す。</p>            |  |
| 評 価 方 法               | <p>評価は出席と最終のレポートをもとに行う。毎回出席をとる。</p>   |   |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>自己分析という大きな課題にチャレンジする積極性が求められる。全回出席を原則とする。</p>  |   |  |

1. オリエンテーションと自己紹介のセッション
2. 心理テストの記入
3. 自分の心理テストの結果(グラフ1)を理解するための交流分析の講義
4. 自分の心理テストの結果(グラフ2、3)を理解するための交流分析の講義
5. 自分の心理テストの結果の分析
6. 異文化シミュレーション・ゲーム(バーンガ)
7. グループ討議(1)
8. グループ討議(2)
9. グループ討議(3)
10. グループ討議(4)
11. 教師としての自分の強みと弱みの自己分析
12. まとめとレポートの提出

|       |                   |      |        |
|-------|-------------------|------|--------|
| 科 目 名 | 生涯教育論(生涯学習概論)(前期) | 担当者名 | 渋谷 英 章 |
|-------|-------------------|------|--------|

|   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>「生涯学習社会」は、現在ではあたりまえの言葉になっているが、とすれば「学校を終えた人々に十分な学習機会が提供されれば生涯学習社会は完成する」という表面的で一面的な理解にとどまることが多い。この授業では、学校教育と社会教育をともに変革して両者の統合を図ることこそが、生涯学習社会の基本的な課題であるという視点から、生涯学習社会における学校教育と社会教育のあり方について追求する。</p> |   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>まず、現在「生涯学習社会」が求められる背景と生涯教育の理念を検討する。そのうえで、生涯学習社会における学校のあり方を現在の日本の教育改革の動向に基づいて考察し、次に生涯各期の学習課題を明確にする。さらに、諸外国の事例との比較を通して、日本の生涯学習の現状と課題を分析する。</p>   |   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | <p>使用する場合には授業中に指示する。</p>  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・真野宮雄編『生涯学習体系論』東京書籍</li> <li>・日本生涯教育学会編『生涯学習事典』東京書籍</li> <li>・倉内史郎・碓井正久編著『新社会教育』学文社</li> </ul> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>評価は、試験の成績をもとに出席状況を加味して行う。「何を学んだか」という知識の量よりも、「いかに学ぶか」という学び方が問われるべきである生涯教育の原則から、試験にはこの原則にふさわしい問題を課し、ノートや各種の文献などの持参を認める。</p>  |   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>授業への出席が必要条件であるが、出席してもただ単に板書を写すだけでは不十分である。講義内容を十分に理解し、さらにその内容について自分自身で考えることが重要である。</p>  |   |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 生涯学習社会とは
2. 「生涯教育論」
3. 「脱学校論」の学校批判
4. 社会教育の定義と特質
5. 社会教育の実際
6. ペタコジーとアンドラゴジー
7. 生涯学習関連施策の展開
8. 学社連携と学社融合
9. 大学改革と生涯学習
10. 高齢化社会、男女共同参画社会と生涯学習
11. ノンフォーマル教育
12. 試験

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 学校教育論（前期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|-----------|------|-------|

|                       |  |  |  |
|-----------------------|--|--|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>学校はどうして必要なかをめぐる問題を考察する中で、学校の持つ意義を学ぶとともに、様々な学校改革案を検討しながら、自分なりの学校改革を構想することを目的とする。</p>   |  |  |
| 講 義 概 要               | <p>学校を究極的に否定していると思われる不登校の子どもの事例を通じて逆に照射される学校の意味と意義を学ぶ。<br/>現代様々に議論されて提案されている学校（教育）改革案をグループ討議を通じて検討し、自分たちの学校（教育）改革案を作成していく。</p> |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・川村他『新 教育を考えるための 8 章（仮題）』（川島書店）</li> <li>・レポート用：藤田英典『教育改革』（岩波新書）</li> </ul>                         |  |
|                       | 参 考 文 献  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐藤学『学校の「死」と「再生」』（太郎次郎社）</li> <li>・奥地圭子『学校は必要か』（NHKブックス）</li> <li>・宇沢弘文『日本の教育を考える』（岩波新書）</li> </ul> |  |
| 評 価 方 法               | <p>随時課すレポートと、作成した学校改革案による。</p>   |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ討議を取り入れるので、積極的に参加されたい。</li> <li>・シラバスは討議の進度により、大きく変更される可能性がある。</li> </ul>          |  |  |

1. 講義の進め方の説明 / 連休明け提出のレポートについて
2. 不登校を考える (1) 学校へ行かなくてはならないのはなぜか
3.       "       (2) 不登校、是か非か (ディベート)
4.       "       (3) 不登校をめぐる実態
5.       "       (4) 学校の意味と意義
6. 学校 (教育) 改革案を考える (1) 学校内学校
7.       "       (2) 癒しの学校
8.       "       (3) 中高一貫制
9.       "       (4) 学校選択制
10.       "       (5) 学校スリム化構想
11.       "       (6) 私たちの学校改革案づくり
12.       "       (7)       "

|       |          |      |        |
|-------|----------|------|--------|
| 科 目 名 | 教育法規（後期） | 担当者名 | 渋谷 英 章 |
|-------|----------|------|--------|

|                       |  |                                |  |
|-----------------------|--|--------------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>教育法規の意義とその構造を理解し、教員としての職務の遂行にあたって、必要に応じて法的な裏付けとなる規定を自ら確認できるような知識と能力を身につけさせる。</p>  |                                |  |
| 講 義 概 要               | <p>はじめに、受講生がこれまでの学校生活で体験した事象がいかなる法的規定にもとづいていたのかを具体的に示し、教育法規を学ぶ意義を示す。その後で、憲法、教育基本法、学校教育法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律、教育公務員特例法などの法規定を検討することによって、教育法体系の構造と教育法の特殊性と具体的に検証していく。いかなる法規定が定められているかということよりも、なぜそのような法規定が存在するのかという問題に重点を置き、単なる条文の解釈にとどまらず、教育学の理論的背景を確認しつつ各法律の条文を考察していく。</p> |                                |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | 『教育小六法』 学陽書房                   |  |
|                       | 参 考 文 献  | 教育制度研究会編『要説 教育制度（全訂版）』 学術図書出版社 |  |
| 評 価 方 法               | <p>評価は、試験の成績をもとに出席状況を加味して行う。試験では、条文を暗記しているかどうかではなく、法規定や条文の意味を正しく理解しているかを問うため、教科書、ノート、教育六法を持参して、それらを参照しながら回答することになる。</p>  |                                |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>授業への出席が必要条件であるが、出席してもただ単に板書を写すだけでは不十分である。講義内容を十分に理解し、さらにその内容について自分自身で考えることが重要である。</p>   |                                |  |

1. 身近な教育事象の裏付けとして、どのように法的な規定が定められているかを示し、教育法規を学ぶ意義について考える。
2. 教育法の法体系およびその原則について考察する。
3. 憲法の教育条項および教育基本法による規定について考察する。
4. 教育基本法の規定とその規定の根源にある公教育原理について考察する。
5. 学校教育法について考察する。
6. 学校教育法について考察する。
7. 地方教育行政の組織及び運営に関する法律について考察する。
8. 地方教育行政の組織及び運営に関する法律について考察する。
9. 教育公務員特例法について考察する。
10. 社会教育法について考察する。
11. 現在の教育問題と教育法について考察する。
12. 試験

|       |                   |      |         |
|-------|-------------------|------|---------|
| 科 目 名 | 教育方法学(前期)(後期)半期完結 | 担当者名 | 町 田 喜 義 |
|-------|-------------------|------|---------|

|                       |  |             |  |
|-----------------------|--|-------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 「コミュニケーション」をキーワードとして「教育の方法と技術」および「教師の役割」を再検討する。  |             |  |
| 講 義 概 要               | <p>「学んだことの証しは、ただ一つで何かが変わることである。」この言葉は、林竹二によって導き出された命題である。林はまた、「一人一人の教師が最終的な、最高の責任を負ってなされる仕事である」というところに教師に課せられた仕事の本質的なしんどさがある。・・・教師の自主性、自発性が教育の生命です。これだけ自由な、自分の責任において遂行できる仕事というものを、卒業してすぐ初めから与えられる職場はどこにもありません。その意味で自分を賭けるに値する、それだけ恐ろしい仕事です。・・・教師自身が{学ぶということ}を抜きにして、{教えるということ}は成立しない」と考えた。</p> <p>このようなことを命題として、担当者の講義、受講生の討論・発表などを試みる。</p> |             |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | 使用しない。      |  |
|                       | 参考文献   | 開講時に別紙配布する。 |  |
| 評 価 方 法               | <p>課題レポート：40%（提出遅れ、指定用紙以外は受理しない）</p> <p>定期試験：45%</p> <p>出席回数：15%（欠席1回につき2点減 - やむを得ず欠席をした場合は証明書と提出する事、遅刻は1点減）</p>   |             |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>OHPの教材作成講習会に参加すること。</p> <p>意見交換の場では積極的に発言すること（accountability）。</p>  |             |  |

1. 「コミュニケーション」の概念を理解する。
2. 「コミュニケーション」と「教育・学習」の関係を理解する。
3. 「メディア」の概念を理解し、「学習情報」との相互作用を理解する。
4. 教育メディアの機能、種類、利用等を理解する。
5. 教育をコミュニケーション分析する。
6. 教師論を討論する。
7. 教材研究とは何か。
8. 授業を設計する。
9. 言語と非言語の機能の相違を知る。
10. 「評価」と「測定」の概念と関係を理解する。
11. 学習における報酬、コミュニケーションのフィード・バックを考える。
12. 各自の教育方法のイメージを描く。

|       |                   |      |     |
|-------|-------------------|------|-----|
| 科 目 名 | 教育方法学(前期)(後期)半期完結 | 担当者名 | 林 潔 |
|-------|-------------------|------|-----|

|   |   |          |  |
|---|---|----------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>教育方法の基礎と、最近の動向について紹介します。</p> <p>教育は対人関係の場という性質ももっています。</p> <p>特に生徒との対人関係の中で、生徒の学習上の問題と共に行動上の問題にも、どうかかわりをもつか、あわせて考えてみたいと思います。</p>   |          |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>教育活動は対人コミュニケーションの様式です。</p> <p>従ってまずコミュニケーションとその課題についてとり上げます。次に動機づけとそれに影響を与える条件を考えます。</p> <p>後半は学級集団における教師の役割、教育調査、教育評価、そして生徒の問題への取り組みの方法の一つとして、認知行動療法の基礎についてとりあげます。</p> <p>また間に受講生の模擬授業を入れたいと思います。</p> |          |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | なし       |  |
|   | 参考文献  | 随時紹介します。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>期末試験を主とします。レポート、平常点を考慮する場合があります。<u>また教職科目なので授業出席も単位取得の条件です。</u>レポート、質問は下記の E-mail を利用されてもよいです。(ただし1000字を超える場合は、分けて送信して下さい)</p>   |          |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>積極的に質問して下さい。あとから思いついたら E-mail (hayashi@shiraume.ac.jp) を使<br/>って下さい。<u>模擬授業に積極的に参加して下さい。</u></p>   |          |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 序および教育活動とコミュニケーション<br/>授業への導入。言語コミュニケーションと意味論 ( semantics )</li> <li>2. 動機づけとそれに影響する条件<br/>達成動機および原因帰属。</li> <li>3. 教育場面における動機づけ要因<br/>教育活動の中の要因をとり上げます。</li> <li>4. 教授法(1)<br/>学習過程の諸要因について。</li> <li>5. 教授法(2)<br/>学習者の諸条件について。</li> <li>6. 模擬授業 ( 任意 )(1)<br/>受講生より取得予定科目について授業をしていただきます。</li> <li>7. リーダーとしての教師の役割<br/>教師を教室におけるリーダーとして位置づけ、PM理論によりその機能について考えます。</li> <li>8. 模擬授業 ( 任意 )(2)<br/>先に同じ。なおそれぞれに参加者の感想をとり、フィードバックをします。</li> <li>9. 教育評価(1)<br/>教育評価の意義、種類、方法についてとり上げます。</li> <li>10. 教育評価(2)<br/>先に同じ。</li> <li>11. 教育調査<br/>面接、質問紙といった教育調査の実際を紹介します。</li> <li>12. 認知的アプローチ<br/>認知行動療法の基礎について紹介します。</li> </ol> |
|----------------------------|--|

|       |               |      |       |
|-------|---------------|------|-------|
| 科 目 名 | ドイツ語科教育法 (前期) | 担当者名 | 系 井 透 |
|-------|---------------|------|-------|

|                       |   |          |  |
|-----------------------|---|----------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>ドイツ語を第一あるいは第二外国語として教える場合に生ずる問題点の検討し、その対策を考える。</p> <p>ドイツ語を教えるための基礎的知識を養う</p> |          |  |
| 講 義 概 要               | <p>毎時間小テストを行う。</p> <p>教授法の歴史的概観を行い、検討する</p> <p>後期は主に模擬授業を行い、教育実習に備える</p>        |          |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | テキストなし   |  |
|                       | 参 考 文 献   | 授業中に指示する |  |
| 評 価 方 法               | 小テスト及び定期試験による   |          |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 出席を重視する<br>も受講すること  |          |  |

1. オリエンテーション及びドイツ語テスト
2. 授業のしくみ
3. 教授法の歴史概観(1)
4.       "               (2)
5.       "               (3)
6. 教室内 Körpersprache について
7. 学習指導要領および教案について
8. 教材研究と教案作成
9. 模擬授業による教授法の研究
10.       "
11. まとめ

|       |              |      |       |
|-------|--------------|------|-------|
| 科 目 名 | ドイツ語科教育法（後期） | 担当者名 | 系 井 透 |
|-------|--------------|------|-------|

|   |                                   |  |  |
|---|-----------------------------------|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 模擬授業による教壇体験をつむ。                   |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 模擬授業                              |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト                              |  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献                  |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 小テスト及び教壇実習による                     |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 教材研究及び教案作成をしっかりとやること<br>欠席をしないこと。 |  |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 模擬授業による教授法の研究
2. "
3. "
4. "
5. "
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. ドイツ語教授法のまとめ

|       |              |      |       |
|-------|--------------|------|-------|
| 科 目 名 | ドイツ語科教育法（後期） | 担当者名 | 系 井 透 |
|-------|--------------|------|-------|

|   |                                   |  |  |
|---|-----------------------------------|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 模擬授業による教壇体験をつむ。                   |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 模擬授業                              |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト                              |  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献                  |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 小テスト及び教壇実習による                     |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 教材研究及び教案作成をしっかりとやること<br>欠席をしないこと。 |  |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 模擬授業による教授法の研究
2. "
3. "
4. "
5. "
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. ドイツ語教授法のまとめ

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 （後期） | 担当者名 | 秋 山 武 夫 |
|-------|-------------|------|---------|

|                       |   |                |  |
|-----------------------|---|----------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 英語を教えるとはどういうことなのか、英語教師はどうあるべきか、理想の英語教育はどうあるべきかなどを、出来るだけ現場をふまえて考えていきます。                              |                |  |
| 講 義 概 要               | を受講した人、またはしている人を対象として、その人たちが実技、つまり実際に授業を行う時間です。教育実習、教員採用試験に役立つ講義にするつもりです。<br>、 の両方を受講することが望ましい講義です。 |                |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 「英語教育学概論」(金星堂) |  |
|                       | 参 考 文 献   | その都度指定する。      |  |
| 評 価 方 法               | この講座は「職業に関する科目」と言えますので、出席を重視します。2回欠席したら、評価Aは出しません、遅刻2回は欠席1回とみなします。                                  |                |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 現代の日本の英語教育界には、若い有能な教師が必要です。鋭意、実力を養い、実際に教員になって、新風を吹きこむ気概を持って受講してほしい。                                 |                |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 序論。授業の進め方について。
2. Video による授業研究。
3. 中学の授業実習（中 1、中 2、中 3）
4. 同上。
5. 同上。
6. 同上。
7. 同上。
8. 同上。
9. 高校の授業実習（高 1、高 2、高 3）
10. 同上。
11. 同上。
12. 同上。

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 （前期） | 担当者名 | 清 水 由理子 |
|-------|-------------|------|---------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>言語教育についての考え方の変遷を学び、さらにこれからの言語教育の在り方を考える。特に日本の英語教育は現在どのような問題を抱えており、それに対してどのような改善策があるかを探る。</p> |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>講義と合わせてビデオ教材を用い、語学教育に関する基本的な考え方を紹介する。詳しくは、授業計画欄を参照。</p>                                      |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 特に定めない   |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <p>塩澤利雄他著（1993）『新英語教育の展開』 英潮社<br/> 伊藤健三他著（1995）『英語の新しい学習指導』 リーベル出版<br/> 畑中孝實、久松豊（1996）『最新英語科教育法』 成美堂<br/> 個々のテーマに関する参考書のリストは、そのつど配布する。</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>出席状況、レポート（教材研究）および期末試験による。</p>   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>教育実習に行く準備のためには、 と の両方を履修することを強く勧めます。</p>   |  |  |

[ 前期 ]:

1. 講義内容、レポート課題(教材研究)について  
英語教師に望まれること
2. 日本における英語教育 - 変遷と現状 -
3. 主要な教授法の特徴 (1) Oral Method, GDM
4. " (2) Oral Approach
5. " (3) Communicative Approach
6. " (4) Others
7. Audio Visual Aids (1) 種類と使用目的
8. Audio Visual Aids (2) 実際の使い方
9. Testing and Evaluation (1) テストの目的とその作成
10. Testing and Evaluation (2) テスト結果の処理と評価
11. Teaching Plan (1) 作成上の留意点
12. Teaching Plan (2) "

【備考】レポートの提出期限は、前期の最後の授業時とする。

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 （後期） | 担当者名 | 清 水 由理子 |
|-------|-------------|------|---------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>言語教育についての考え方の変遷を学び、さらにこれからの言語教育の在り方を考える。特に日本の英語教育は現在どのような問題を抱えており、それに対してどのような改善策があるかを探る。</p> |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>より具体的かつ実践的なことを扱う。講義のほか、受講者による四技能に関する教材研究発表、模擬実習と討論を中心に進める。<br/>詳しくは、授業計画欄を参照。</p>            |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 特に定めない。  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <p>塩澤利雄他著（1993）『新英語教育の展開』 英潮社<br/> 伊藤健三他著（1995）『英語の新しい学習指導』 リーベル出版<br/> 畑中孝實、久松豊（1996）『最新英語科教育法』 成美堂<br/> 個々のテーマに関する参考書のリストは、そのつど配布する。</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>平常点（研究発表）、レポート（研究発表のまとめ、指導案作成）および期末試験による。</p>  |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>後期は、受講者に実際に教材作成をしたり、積極的に討論に参加してもらうため、それだけの心構えを持って受講してほしい。</p>                                |  |  |

[ 後期 ]:

1. 授業の進め方、レポート課題について  
「文法」の指導について
2. 「聞くこと」と「話すこと」の指導について
3. 研究発表 ( 1 ) 「聞くこと」と「話すこと」の指導方法
4. 「読むこと」の指導について
5. 研究発表 ( 2 ) 「読むこと」の指導方法
6. 「書くこと」の指導について
7. 研究発表 ( 3 ) 「書くこと」の指導方法
8. 研究発表 ( 4 ) 模擬実習
9. 研究発表 ( 5 )        "
10. 研究発表 ( 6 )       "
11. 研究発表 ( 7 )       "
12. 研究発表 ( 8 )       "

【備考】レポート(指導案作成)の提出日は、第一回目は、11月の大学祭あけの最初の授業日、  
最終レポートは、2000年1月最後の授業時とする。

|       |             |      |       |
|-------|-------------|------|-------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 (前期) | 担当者名 | 三 好 健 |
|-------|-------------|------|-------|

|                       |   |                                     |  |
|-----------------------|---|-------------------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 一言でいえば、立派な英語教員になってもらうための授業である。立派な英語教員となるための必要最小限度の知識と心構えについて述べたい。とくに英語教育を、単なる技術教育としてでなく、人間教育の観点から考察することを強調し、教育者としての英語教員像を理解してもらうのが、最大の目標である。      |                                     |  |
| 講 義 概 要               | 英語教育の意義から始めて、英語教育の歴史や各種の教授法を概観し、英語教育の目的を論じ、なお教室における学校文法の扱い方と指導案の書き方にも触れる。<br>総論的な の延長として に進むので、一方のみの受講では、どうしても不十分と言わざるを得ない。受講者はぜひ と を続けて受けてもらいたい。 |                                     |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  |                                     |  |
|                       | 参 考 文 献   | 「日本の英学100年」・「日本の英語教育史」・「英語教育大論争」など。 |  |
| 評 価 方 法               | 出席状況とレポートと定期試験による。  |                                     |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 真剣に英語教員になる意志をもつ諸君に受講してほしい。遅刻・欠席の趣味は認めない。受講希望者は第1回目の授業に必ず出席して名前を届けること。   |                                     |  |

1. イントロダクション 今後の講義予定を説明し、英語教育の意味を考えてもらう。受講希望者に名前を届けてもらって名簿を作製する。
2. [外国における語学教育の歴史と各種教授法] その1 中世 (Grammar-Translation Method) からルネサンス。
3. [同上] その2 ルネサンスから19世紀。
4. [同上] その3 19世紀以降の各種教授法。
5. [日本の英語教育の歴史] 幕末時代 (蘭学から英学へ)。
6. [同上] その2 明治時代。
7. [同上] その3 大正から昭和へ。
8. [同上] その4 戦後の昭和から現代へ。
9. [英語教育の目的] その1 外国語を学ぶ意義 (実用目的と教養目的)。
10. [同上] その2 英語学習の意義 (英語の重要性は国際性にあるのか?)。
11. [学校文法の扱い方] 英語教室内での英文法の役割とその勉強の仕方を説明する。
12. [教育指導案の書き方] 指導案の実例を示して書き方を教える。

|       |             |      |       |
|-------|-------------|------|-------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 （後期） | 担当者名 | 三 好 健 |
|-------|-------------|------|-------|

|   |   |                                   |  |
|---|---|-----------------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>英語の教材研究を通じて、教員としての自己の学力を反省してもらい、同時に英語教室の現場で役立つ実的な知識・技術を身につけてもらうことを目標とする。</p> <p>英語科教育法 だけで終らず、必ずこの も履習してほしい。</p>                         |                                   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>英語教室での学校文法の扱い方と授業のやり方を説明し、指導案の書き方にも触れた後、高校用英語読本を使って、受講生全員に教材研究を兼ねた授業の実演をやってもらう。一人ひとり指導案の提出が必須となる。なお講義の締めくくりとして、担当者の考える英語教員の理想像を披露する。</p> |                                   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 高校用英語読本                           |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | 「英文法解説」(江川泰一郎著)・「新自修英文典」(山崎貞著)など。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 出席状況と授業演習とレポート(指導案)と定期試験により評価する。  |                                   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 真剣に教員としての英語力を反省したい諸君に来てもらいたい。遅刻・欠席の好きな学生はおことわり。受講希望者は必ず第1回目の授業に出席して名前を届けること。  |                                   |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <p>1. イントロダクション 今後の講義の進め方を説明し、学生による授業演習の意義と目標を述べると共に、演習のしかたを具体的に例示する。</p> <p>2. [学生による授業演習とその講評] 学生一人ひとりに演習をやると同時に指導案を提出してもらおう。</p> <p>3. [同上(その2)] 同上。</p> <p>4. [同上(その3)] 同上。</p> <p>5. [同上(その4)] 同上。</p> <p>6. [同上(その5)] 同上。</p> <p>7. [同上(その6)] 同上。</p> <p>8. [同上(その7)] 同上。</p> <p>9. [同上(その8)] 同上。</p> <p>10. [同上(その9)] 同上。</p> <p>11. [演習のまとめ] 授業演習の総評。</p> <p>12. [講義のまとめ] 英語教員の理想像を考察する。</p> |
|----------------------------|--|

|       |             |      |             |
|-------|-------------|------|-------------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 (前期) | 担当者名 | J.J. DUGGAN |
|-------|-------------|------|-------------|

|   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | The purpose of this two-term course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction. |   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | We shall spend most of this first term in reading, lecture, and discussion of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based.  |   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | Underwood, M. <i>Effective Class Management</i> . Longman.<br>Handouts. |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  |   |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), a number of assignments, and a final quiz.  |   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |   |   |  |

- 1 . Course description and explanation. Assignment.
- 2 . Theme: *The role of the teacher*. Lecture. Discussion. Longman text pp. 7-18
- 3 . Theme: *The influence of the teaching situation*. Lecture. Discussion. Longman text pp.19-24
- 4 . Theme: *The aspect of the classroom*. Lecture. Discussion. Longman text pp.25-57
- 5 . Theme: *The relationship of teacher, classroom and situation*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 6 . Theme: *Considering "Why?"-- Approach*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.30-38
- 7 . Theme: *Considering "How?"--Traditional Methods*. Lecture. Discussion. Handouts.
- 8 . Theme: *Considering "How?"--New Methods*. Lecture. Discussion. Handouts. Oxford text pp.241-253
- 9 . Theme: *Considering "What?"--Technique*. Lecture. Discussion.
- 10 . Theme: *Planning a syllabus*. Lecture. Discussion. Handouts. Longman text pp.58-79
- 11 . Theme: *Preparing a syllabus*. Lecture. Discussion. Assignment.
- 12 . First term summary & review. Assessment.

|       |             |      |             |
|-------|-------------|------|-------------|
| 科 目 名 | 英語科教育法 (後期) | 担当者名 | J.J. DUGGAN |
|-------|-------------|------|-------------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | The purpose of this two-term course is to not just introduce the student to the necessary teaching techniques (how to teach), but also to establish a basis of understanding of the approaches, concepts and reasoning on which foreign language education is based, and upon which the student will be able to build and develop a coherent plan of instruction. |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | This second term course will be devoted to student in-class practice teaching based on the material covered in the first term, and incorporating practical teaching techniques that will be covered in reading and lecture.   |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | Hubbard, P. et.al. <i>A Training Course for TEFL</i> . Oxford University Press.<br>Handouts. |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | Grades will be assessed based on in-class participation (and therefore attendance), and either a presentation or a final paper.   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |   |  |  |

- 1 . Second term course description and set-up. Review of first term material.
- 2 . Theme: *Traditional Teaching Techniques*. Lecture. Discussion. Oxford text pp. 3-30.
- 3 . Theme: *Teaching Reading & Vocabulary*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.41-61.
- 4 . Theme: *Teaching Reading & Vocabulary, Part 2* Presentations. Discussion.
- 5 . Theme: *Teaching Writing & Composition*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.61-79.
- 6 . Theme: *Teaching Writing & Composition*. Presentations. Discussion.
- 7 . Theme: *Teaching Listening*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.79-95.
- 8 . Theme: *Teaching Listening, Part 2* Presentations. Discussion.
- 9 . Theme: *Teaching Oral Communication*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.198-205.
- 10 . Theme: *Teaching Oral Communication, Part 2* Presentations. Discussion.
- 11 . Theme: *Teaching Oral Communication & Pronunciation*. Lecture. Discussion. Oxford text pp.207-239.
- 12 . Second term summary & review.

|       |                |      |         |
|-------|----------------|------|---------|
| 科 目 名 | フランス語科教育法 (前期) | 担当者名 | 一 戸 とおる |
|-------|----------------|------|---------|

|                       |   |  |  |
|-----------------------|---|--|--|
| 講 義 の 目 標             | フランス語とはどういう言語であり、その何をどのように教えるかについての概略を学生諸君と共に考えていきたい。                                   |  |  |
| 講 義 概 要               | 日本人がフランス語を学習する際にどういう問題があるか、フランス語教育のいくつかの側面(「年間授業計画」参照)に則して考えてみたい。前期は、したがって、理論的な考察が主となる。 |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 適宜コピー配布。   |  |
|                       | 参 考 文 献   | 中村啓佑・長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』駿河台出版社<br>Henri Boyer 他 “Nouvelle introduction à la didactique du français langue étrangère”, CLE International |  |
| 評 価 方 法               | 授業への積極的参加、発表、レポート、など。   |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど |   |  |  |

- 1 . Qu'est-ce que le langage? Enseigner quoi?
- 2 . français écrit et français oral
- 3 . prononciation et orthographe
- 4 . morphologie
- 5 . vocabulaire
- 6 . syntaxe
- 7 . types de textes(1)
- 8 . types de textes(2)
- 9 . histoire des méthodologies
- 10 . évaluation
- 11 . matériel pédagogique(1)
- 12 . matériel pédagogique(2)

|       |                |      |         |
|-------|----------------|------|---------|
| 科 目 名 | フランス語科教育法 （後期） | 担当者名 | 一 戸 とおる |
|-------|----------------|------|---------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | フランス語とはどういう言語であり、その何をどのように教えるかについての概略を学生諸君と共に考えていきたい。                 |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 各側面のポイントを1・2 学生諸君に選んでもらって、具体的な教案を作成し、模擬授業をやってもらいたいと思っている。後期は、実践が主となる。 |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 適宜コピー配布  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | 中村啓佑・長谷川富子 『フランス語をどのように教えるか』 駿河台出版社<br>Henri Boyer 他 “Nouvelle introduction à la didactique du français langue étrangère”, CLE International |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 授業への積極的参加、発表、レポート、など。   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |   |  |  |

- 1 . Qu'est-ce que le langage? Enseigner quoi?
- 2 . français écrit et français oral
- 3 . prononciation et orthographe
- 4 . morphologie
- 5 . vocabulaire
- 6 . syntaxe(1)
- 7 . syntaxe(2)
- 8 . types de textes(1)
- 9 . types de textes(2)
- 10 . évaluation
- 11 . matériel pédagogique(1)
- 12 . matériel pédagogique(2)

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 社会科教育法 (前期) | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|-------------|------|---------|

|   |  |      |  |      |  |
|---|--|------|--|------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>社会科は、現在、小学校3年から中学校3年まで実施されている。ここで取り扱うのは、中学校対象の社会科教育法である。</p> <p>社会科を、その特質から理解し、社会科に要請されている課題を把握するようにし、社会科の目標、内容に対応した教育方法を創意工夫し、社会科の実践的指導力を身に付ける。</p>                              |      |  |      |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>戦後、出発当時の初期社会科の特質を先ず認識させる。また、その後の社会科の変容を、学習指導要領の変遷を追いながら理解させる。</p> <p>さらに、現代の社会科は、新しい学力観によって、生徒の関心、意欲、態度が重視されるので、指導方法を創意、工夫しなければならない。地理的内容、歴史的内容、公民的内容に対応した教育方法がとれるように授業を進めたい。</p> |      |  |      |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | <table border="1"> <tr> <td>テキスト</td> <td>小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院<br/>「中学校指導書 社会編」 文部省 大阪書籍 KK</td> </tr> <tr> <td>参考文献</td> <td></td> </tr> </table>                               | テキスト | 小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院<br>「中学校指導書 社会編」 文部省 大阪書籍 KK | 参考文献 |  |
| テキスト  | 小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院<br>「中学校指導書 社会編」 文部省 大阪書籍 KK   |      |  |      |  |
| 参考文献  |  |      |  |      |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 単に、知識、理解を求める講座ではないので、出席を重視する。レポートかテストか未定。  |      |  |      |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、社会科教育法 も受講することを期待する。   |      |  |      |  |

1. 社会科教育法 の講座の概要説明と戦前の修身、地理、日本歴史の授業内容、方法、性格について、また社会科の前史を理解させる。
2. 戦後の、新しい科目の設定構想、アメリカ教育使節団による社会科の提案などについて、また、社会科出発当初の理念や設定経過について
3. 戦後出発時の社会科の内容（初期社会科）について
4. 問題解決学習の理論と方法について
5. 初期社会科への批判が学力低下に向けられたことや、道徳教育充実方策と関連させて、社会科に対する批判や要望が出て、論議が行われたので、その事情や内容について
6. 社会科の学習指導要領の変遷を追い、改訂ごとの趣旨や要点その背景などについて
7. 最も新しい平成10年度の学習指導要領（社会科）の改訂について、また、その趣旨、改訂の要点、その背景などについて
8. 社会科の目標、地理的分野、歴史的分野の改訂の要点、各目標、内容の概要について
9. 公民的分野の改訂の要点、目標、内容について、また教科全体の内容構成の特質について
10. 社会科の各内容に即した指導法があることを示し、その概略について
11. 各分野の指導計画の作成と学習指導案の作成について
12. 模擬授業（2, 3人）

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 社会科教育法 （後期） | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|-------------|------|---------|

|   |   |                          |  |
|---|---|--------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>社会科は、現在、小学校3年から中学校3年まで実施されている。ここで取り扱うのは、中学校対象の社会科教育法である。</p> <p>社会科を、その特質から理解し、社会科に要請されている課題を把握するようにし、社会科の目標、内容に対応した教育方法を創意工夫し、社会科の実践的指導力を身に付ける。</p> |                          |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>ディベート、模擬授業などを行うなどして、授業の実践的指導力を身につけさせるようにする。</p>  |                          |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | 小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院 |  |
|   | 参考文献  |                          |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>単に、知識、理解を求める講座ではないので、出席を重視する。レポートかテストか未定。</p>  |                          |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、社会科教育法 も受講することを期待する。</p>   |                          |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 社会科教育法 は、社会科教育法 の実践編というべきもので、社会科の実践的指導力を育成する講座である。その概略について説明する。</li> <li>2. 指導方法と特に関連の深い新しい学力観について</li> <li>3. 思考力、判断力、表現力、態度を育成する社会科の代表的な指導方法について</li> <li>4. 学習指導案の作成について（教科書を参考に、実際に指導案を作成する）</li> <li>5. 作成した指導案について学生個々に発表させ、注意すべき点を指摘し、よりよい指導案を作成する。</li> <li>6. 実際に作成した指導案に基づいて模擬授業を行う。自己評価、意見交換、その講評</li> <li>7. 同上</li> <li>8. 同上</li> <li>9. 指導方法の一つとしてディベートを取り上げ、そのねらいや方法など説明し、実際にディベートのテーマを決め、次回に行うディベートの準備をする。</li> <li>10. 一つのテーマについて、実際にディベートを行う。行ったディベートについて、意見や感想を交換し、講評する。</li> <li>11. 同上</li> <li>12. 社会科教育法について、これまでの授業の総括、また、社会科の現代的課題について説明する。</li> </ol> |
|----------------------------|--|

|     |                   |      |       |
|-----|-------------------|------|-------|
| 科目名 | 地理・歴史科教育法「歴史」(前期) | 担当者名 | 古川 堅治 |
|-----|-------------------|------|-------|

|             |  |                                       |  |
|-------------|--|---------------------------------------|--|
| 講義の目標       | <p>「歴史」を教えるということは、常に教える側の歴史観を問われることでもある。その意味で、「歴史」を教える事の「コトの重大さ」を認識する必要がある。それらを前提に現代の歴史学の成果と歴史教育の関連、歴史教育の沿革と具体的な教授法などを取り上げながら、歴史を教える基本的なスタンスを確立することが本講座のねらいである。</p>  |                                       |  |
| 講義概要        | <p>講義ではプリントを配布しながら概説的に説明していくが、積極的な討論が湧き起こることも期待したい。また、ビデオ上映によって、今、話題になっている教科書論争や諸外国との歴史の共通認識の問題についても考えていきたい。授業は、アト・ホームな雰囲気で行うことに心がけたい。なお後半3回は「模擬授業」の回をもうけ、各回とも1~2人ずつ(1人 30~40分)それぞれ日本史、世界史どちらの分野でも自分の好きなテーマを選んで「授業」を行なってもらう。</p> |                                       |  |
| 使用教材        | テキスト   | 特に使用することはない。                          |  |
|             | 参考文献   | 最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館等で参考にする。 |  |
| 評価方法        | <p>基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合も考慮する。なお、「模擬授業」を希望する人は、その報告・発表をもってレポートの代わりとする。</p>   |                                       |  |
| 受講者に対する要望など | <p>教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々人が主体的・積極的に授業に参加することを期待する。</p>   |                                       |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <p>1. 「はじめに ～なぜ歴史を学ぶのか？（歴史学と歴史教育）～」</p> <p>1) 現在・過去・未来      2) 歴史を学ぶ者の責任と課題</p> <p>2. 「歴史教育の方法」</p> <p>1) ビデオ・映像資料を使った学習      2) 史・資料の操作</p> <p>3. 「歴史教育の方法」</p> <p>1) 人物の採り上げ方                      2) 地域の学習</p> <p>4. 「『世界史A』と『日本史A』の扱い方」</p> <p>1) A科目とB科目                          2) 世界史の場合と日本史の場合</p> <p>5. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」</p> <p>1) ヨーロッパ史教育の今日的意義      2) 「文化圏」学習から「広域的地域世界」学習へ</p> <p>6. 「歴史教育におけるヨーロッパ史」</p> <p>1) 国際歴史教科書対話                      2) ドイツの例（VIDEO）</p> <p>7. 「歴史教育におけるアジア史」</p> <p>1) 日韓教科書論争（VIDEO）          2) 日本の「アジア認識」</p> <p>8. 「歴史教育におけるアジア史」</p> <p>1) 世界史における東アジアの課題と方法      2) 歴史認識の「共通化」の問題</p> <p>9. 「まとめ ～歴史のこわさと面白さ～」</p> <p>1) 歴史のこわさ                              2) 歴史の面白さ</p> <p>10. 「模擬授業」</p> <p>11. 「模擬授業」</p> <p>12. 「模擬授業」</p> |
|----------------------------|--|

|       |                   |      |       |
|-------|-------------------|------|-------|
| 科 目 名 | 地理・歴史科教育法「地理」(後期) | 担当者名 | 犬 井 正 |
|-------|-------------------|------|-------|

|                       |  |                     |  |
|-----------------------|--|---------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 高等学校における地理歴史科の地理に関する教科教育法の講義である。地理教育史、地理教育の方法、地理教育の実際、地理教育の課題を考察する。                  |                     |  |
| 講 義 概 要               | 講義はVTR、討論形式、スライドなどを援用しながら進めていく。年間予定計画に示したように、毎回適宜にトピックスを提示しながら、高校における地理教育の実際、展望等を行う。 |                     |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | なし                  |  |
|                       | 参 考 文 献  | 参考文献リストを第二週以降に配布する。 |  |
| 評 価 方 法               | 授業への貢献度とレポート等の結果を総合的に判断する。   |                     |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | なし   |                     |  |

1. 本講義の受講の心構えおよび、講義方法、講義内容のオリエンテーションを行う。
2. 第二次世界大戦後の地理教育のあゆみ。アメリカ社会科教育の影響、および日本の小・中・高等学校の地理教育の関連を中心とする。
3. 社会科教育における地理教育と、新しい地・歴史科における地理教育との相違について。文部省高等学校学習指導要領を中心として考察する。
4. 学習指導要領と教科書（地図帳を含む）の持つ意味について。「教科書で教えるのか、教科書を教えるのか」論争を考察する。
5. 地理教育の実際(1) 地図（読図、描図）教育の基礎的方法について。
6. 地理教育の実際(2) 自然地理学習の意義を理科教育、特に地学教育との関連と相違を通して考察する。
7. 地理教育の実際(3) 野外観察、野外調査、地域調査の計画と指導法について。
8. 地理教育の実際(4) 地理的情報の活用と効果的な地名学習の方法について。
9. 地理教育の実際(5) 系統地理学習と地誌学習の相違および学習効果について。
10. 地理教育の実際(6) 異文化理解を国際理解の方法。時事問題の取り扱い方に関連させながら講述する。
11. 地理教育の実際(7) 年間指導計画と評価について。
12. 講義のまとめにかえて、現在日本の地理教育が直面している課題について講述する。

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 公民科教育法 (前期) | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|-------------|------|---------|

|                       |  |  |  |
|-----------------------|--|--|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>公民科では、国際化、情報化の進展に主体的に対応できる公民としての資質をもつ人間の育成を目指す、十分それを達成できる公民科教育法を身につけさせる。</p>  |  |  |
| 講 義 概 要               | <p>戦前の公民教育が極端な国家主義や軍国主義に基づいたものであったことを認識させ、その反省の上に立って戦後の公民教育が発したことを理解させる。</p> <p>公民科は、「公民としての資質の育成」を目指しているが、これを達成するための指導内容、方法について理解させる。</p> |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | <p>小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院<br/>文部省『高等学校指導要領解説 公民編』実教出版 KK</p> |  |
|                       | 参 考 文 献  |  |  |
| 評 価 方 法               | <p>単に、知識、理解を求める講座ではないので、出席を重視する。レポートかテストか未定。</p>   |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、公民科教育法 も受講することを期待する。</p>  |  |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 年間の公民科教育法のスケジュールについて 特に、前期の公民科教育法 の概要について<br/>現代における公民科教育の役割について</li> <li>2. 戦後発足した公民教育刷新委員会の答申や新教育指針から引き出される戦後公民教育の構想について</li> <li>3. 公民科教育の意義や目的を正しく理解するための「公民」の概念や「公民としての資質」について</li> <li>4. 公民科教育の代表的な指導法や新しい学力観について</li> <li>5. 平成11年の学習指導要領の公民科の改訂について、その理由、社会的背景について。また、戦後、社会科の倫理や政経の分野の歴史の変遷について</li> <li>6. 公民科の科目「現代社会」の目標と内容構成について</li> <li>7. 公民科の科目「倫理」の目標と内容構成について</li> <li>8. 公民科の科目「政治・経済」の目標と内容構成について</li> <li>9. 指導計画、学習指導案の作成</li> <li>10. 同上</li> <li>11. 模擬授業の実施（2～3人）</li> <li>12. 同上</li> </ol> |
|----------------------------|--|

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 公民科教育法 （後期） | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|-------------|------|---------|

|                       |  |                          |  |
|-----------------------|--|--------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 公民科では、国際化、情報化の進展に主体的に対応できる公民としての資質をもつ人間の育成を目指す。十分それを達成できる公民科教育法を身につけさせる。                             |                          |  |
| 講 義 概 要               | 目標、内容に対応した指導方法を考究し、実際に模擬授業などを行い、実践的指導力を身に付けさせる。また、表現力や判断力を身に付けさせるため、ディベートの授業など新しい指導方法を開発する意欲と実践力を培う。 |                          |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | 小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院 |  |
|                       | 参考文献   |                          |  |
| 評 価 方 法               | 単に、知識、理解を求める講座ではないので、出席を重視する。レポートかテストか未定。  |                          |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 実践的指導力を身につけ、充実した学習を行えるように、公民科教育法 も受講することを期待する。   |                          |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 公民科教育法 は、公民科教育法 の実践編であること。後期の講座の概要について
2. 新しい学力観における関心・意欲・態度の育成や、表現力、判断力の伸長を公民科教育の関連について
3. 公民科の授業づくりと「教育内容」、「教材」と「授業過程」について
4. 公民科の教科書を参考に指導案の作成
5. 作成した指導案について意見交換、講評
6. 模擬授業の実施、自己批判、意見交換、講評
7. 同上
8. 同上
9. 論理的な思考力や表現力を育成する授業方法をしてのディベート、価値明確化について
10. ディベート、価値明確化の授業実施、感想、意見交換、講評
11. 同上
12. 公民科教育法についてこれまでの講座の総括、特に公民科教育法の課題について

|       |             |      |         |
|-------|-------------|------|---------|
| 科 目 名 | 道徳教育の研究（後期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|-------------|------|---------|

|                       |  |  |  |
|-----------------------|--|--|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>今日の道徳教育への強い要請は、子どもの「心の飢餓」や「心の荒廃」への対応策として主張される傾向がある。しかし自己立法的主体としての自由な実践的能力を一人ひとりの人間性として形成することを目標とする道徳教育は、教育の究極の目的であり、単なる対応策や手段ではない。古くから道徳を教えることが可能であるかが問われてきた。道徳教育についての西欧の思想と東洋の思想には文化の相対性に基づく違いがある。文化的価値の多様性と物質文明の普遍性が様々な矛盾を孕みつつある社会の中で、学校において共に道徳を学ぶことの意味は何かを考えてみたい。</p> |  |  |
| 講 義 概 要               | <p>次の諸問題について講義する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・善く生きようとする人間の本质について</li> <li>・道徳の哲学的基礎について</li> <li>・道徳性の発達について</li> <li>・わか国の道徳教育の歴史</li> <li>・学校における道徳教育の実践</li> </ul>  |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | 『共にまなぶ道徳教育』改訂版 村井実、遠藤克弥編著 川島書店   |  |
|                       | 参 考 文 献  | <p>『善さの構造』村井実著 講談社学術文庫<br/> 『道徳は教えられるか』村井実著 国土新書<br/> 『道徳性の発達と道徳教育』永野重史編 新曜社<br/> 『「道徳」授業批判』宇佐美寛著 明治図書<br/> 『子どもの道徳性と資料研究』森田卓也著 明治図書</p> |  |
| 評 価 方 法               | 評価は定期試験の成績によっておこなう。  |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 講義に出席するだけでなく、自ら考え、ノートをとり、不明な点は質問すること。  |  |  |

1. 善く生きようとする人間の本质について
2. 善さとは何かについて
3. 道徳の価値基準をめぐる道徳哲学の諸説について
4. 道徳性の発達についての諸説について
5. 道徳をどう教えるかについての様々な考え方について
6. 戦前までの道徳教育について
7. 戦後の道徳教育について
8. 学校における道徳教育の構造
9. 各教科や特別活動と道徳教育の関係について
10. 「道徳の時間」における道徳指導について
11. 道徳教育の内容について
12. 「道徳の時間」の指導案の作成と指導過程について

|       |             |      |       |
|-------|-------------|------|-------|
| 科 目 名 | 道徳教育の研究（後期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|-------------|------|-------|

|   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 道徳という価値にかかわる問題について、原理的、思想史的な基礎的知識を獲得し、発達理論と授業実践に学びながら、道徳授業の実践案を作成できるようにすることを目的とする。   |   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>1. 道徳とは何か、そしてそれを教えるとはどういうことか、という問いから出発し、道徳的価値の根源である「善」に関する人類の思想的営為を、西洋・東洋にさぐる。そこから導き出された道徳をめぐる二つの立場を確認し、それが今日の道徳教育の考え方の枠組みの基礎をなしていることを学ぶ。</p> <p>2. 道徳性の発達理論について学ぶ。</p> <p>3. 普遍的な価値の立場から、道徳教育の実践を検討し、道徳の授業に必要な観点を学ぶとともに、実際に授業案を作成してみる。</p> |   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | ・藤田昌士『道徳教育』（エイデル教育研究所）  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・村井実『「善さ」の構造』（講談社学術文庫）</li> <li>・M.ドベス『教育の段階』（岩波書店）</li> <li>・尾花清『道徳教育論』（大月書店）</li> <li>・宇田川宏『生きる意味を学ぶ道徳教育』（同時代社）</li> </ul> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 主として、授業時間内に行う試験および道徳授業実践案による。  |   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 参考文献にも随時目を通していくこと。   |   |  |

1. 道徳とは何か。道徳を教えるとはどういうことか。
2. 「善」の思想史 西洋(1)
3. " " 西洋(2)
4. 日本における道徳教育の歴史
5. 道徳性発達の理論
6. 道徳教育で扱う価値と道徳実践能力について
7. 道徳教育実践の検討(1) アメリカの実践
8. " " (2) 日本の実践
9. 道徳授業案の作成(1)
10. " " (2)
11. " " (3)
12. 試験

|       |                      |      |         |
|-------|----------------------|------|---------|
| 科 目 名 | 道徳教育の研究（前期）(後期) 半期完結 | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|----------------------|------|---------|

|                       |  |                          |  |
|-----------------------|--|--------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | 道徳教育の意義をよく理解し、道徳の時間を実際に指導できるようにする。そのために、いくつかの指導方法を身につける。 |                          |  |
| 講 義 概 要               | 道徳教育の意義、道徳教育の歴史、心の教育について理解を深め、道徳の時間における指導技術を身につける。       |                          |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | 小川一郎・中野目直明編『新しい道徳教育』酒井書店 |  |
|                       | 参考文献   | 小川一郎『在り方生き方指導の理論と実践』清水書院 |  |
| 評 価 方 法               | 出席重視、期末試験かレポートか未定  |                          |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 実際に年間指導計画、学習指導案の作成など作業を行うので出席しなければ意味がない。                 |                          |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 道徳とは何か、道徳教育の目的と意義
2. 戦前の道徳教育の特色、徳目主義、国家主義的内容、修身科
3. 戦後の道徳教育の特色、全面主義、「道徳」の時間特設の意味
4. 人間の本質と生き方指導
5. 学習指導要領「道徳」の理解と道徳性
6. 道徳教育と教師の役割、道徳教育と他の領域との関連
7. 「道徳」の時間の内容と方法、資料とその扱い方
8. 「道徳」の時間と年間指導計画、指導案の作成
9. 同上
10. 模擬授業
11. 同上
12. 模擬授業の総括と講評

|       |          |      |         |
|-------|----------|------|---------|
| 科 目 名 | 特別活動（前期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|----------|------|---------|

|                       |  |   |  |
|-----------------------|--|---|--|
| 講 義 の 目 標             | 学習指導要領に示された中学校・高等学校における特別活動の目標をふまえながら、特別活動の教育課程としての本質と内容を理解するとともに、その指導原理や方法について学ぶ。   |   |  |
| 講 義 概 要               | <p>次の諸問題について講義する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領や答申等に述べられている特別活動の役割</li> <li>・経験学習の本質</li> <li>・集団生活と人間形成</li> </ul> |   |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | <p>教師養成研究会 教職課程講座 6<br/>『特別活動の理論と方法』江川政成編 学芸図書株式会社</p>            |  |
|                       | 参考文献   | <p>文部省『中学校指導書、特別活動編』 ぎょうせい<br/>文部省『高等学校学習指導要領解説、特別活動編』 東洋館出版社</p> |  |
| 評 価 方 法               | 評価は定期試験の成績によっておこなう。  |   |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 講義に出席し、自ら問題を考え、不明なことは調べ、質問すること。  |   |  |

1. 特別活動の今日的意義と目標について
2. 特別活動の変遷について
3. 特別活動の特質と内容について
4. 特別活動の方法的特質について
5. 学級活動・ホームルーム活動の指導について
6. 生徒会活動の指導について
7. クラブ活動・部活動の指導について
8. 学校行事の指導について
9. 特別活動と学級・学校経営について
10. 特別活動と地域社会のかかわり
11. 社会化、個性化、文化化と特別活動のかかわり
12. 特別活動の展望と課題

|       |                  |      |         |
|-------|------------------|------|---------|
| 科 目 名 | 特別活動（前期）（後期）半期完結 | 担当者名 | 佐 藤 利 明 |
|-------|------------------|------|---------|

|   |   |                                     |  |
|---|---|-------------------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>学習指導要領第1章総則第1（款）教育課程編成の一般方針1。<br/>現・新学習指導要領特別活動目標の基本理念と、各分野の具体的実践活動について理解する。<br/>特別活動は生徒の人間形成に重要な領域であり、学校教育目標達成に直接影響があることを講義する。</p>  |                                     |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>現・新学習指導要領について（中教審答申を含む）教育課程の一般方針。<br/>特別活動の変遷及び特別活動の特質と目標。体験学習。<br/>生徒の自律性、自主性、自発性、創造性を養う重要な領域であることの理解。<br/>学級（H.R）活動の人間関係と指導計画の実際、所属感・成功感等の具体例。<br/>生徒会活動・クラブ活動（現）・学校行事の意義と実際<br/>特別活動と週5日制時代における地域とのかかわり。<br/>特別活動の評価と課題</p> |                                     |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | <p>現代の特別活動 酒井書店・育英堂。<br/>プリント配布</p> |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  |                                     |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>定刻出席とレポート評定<br/>レポート提出 教務課一係あて。前期 平成11年7月22日（木）まで<br/>後期 平成12年1月20日（木）まで</p>   |                                     |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>「指導者」を目指す意識を強くもって受講する。止むを得ず欠席の場合は欠席届と論作文（課題はその都度指示）をすみやかに提出する。</p>   |                                     |  |

1. 期中の講義内容の概要説明。  
     学習指導要領について、現・新教育課程編成の一般方針と特別活動。
2. 学校教育と特別活動の理念と意義  
     特別活動の現・新の授業時教、教師の援助・助言・指導。
3. 特別活動の変遷、学校生活の充実・改善向上をはかる。
4. 自主的、自発的、自治的資質・能力の育成をはかるための討議及び指導計画
5. 学級（H.R）経営について、存在感・成功感・充実感・所属感を味あわせる学習。
6. 生徒会活動の実際、指導計画　クラブ活動（現）の実際、指導計画
7. 学校行事の実際、特別活動と道徳教育
8. 登校拒否（学校ざらい）等今日的課題の討議と指導
9. いじめ事例についての討議と指導
10. 学級・学年・学校経営と特別活動とのかかわり。  
     教育相談。進路指導
11. 週5日制と家庭・地域の特別活動のかかわり。体験学習。
12. 特別活動の展望と課題。  
     レポート課題提示。

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 生徒指導法（後期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>生徒指導の目標は、学習指導と密接に関連しつつ、むしろこれを補完し、教育活動全体を通じて一人々の全人格的資質や主体的な生活態度を育成し、人間としての個性的な生き方や在り方を実現することにある。本講義は、このような目標を実現するための指導法についての基本的な知識と学級集団づくりの重要性についての認識を深めることを目的とする。</p>              |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>次の諸問題について講義する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導の本質</li> <li>・生徒指導の基礎理論</li> <li>・生徒指導の方法</li> <li>・生徒指導の組織と運営</li> <li>・学校教育相談の基礎理論</li> <li>・進路指導の基礎理論</li> </ul> |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | <p>教師養成研究会 教職課程講座7 『生徒指導の理論と方法』<br/>江川政成編 学芸図書株式会社</p>   |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <p>A．J．ジョーンズ著（井坂訳）『生活指導の原理』文教書院<br/>A．E．トラックスラー著（大塚、澤田共訳）『ガイダンスの技術』同学社<br/>文部省『生徒指導の手引き』（改訂版）<br/>宮坂哲文著『生活指導と道德教育』明治図書</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>評価は定期試験の成績によっておこなう。</p>  |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>講義に出席することが大前提である。自ら問題を考え、不明な点は調べ、質問すること。</p>   |  |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 社会の変化と教育の荒廃が提起する教育の課題について
2. 生徒指導の意義と目的について
3. 生徒指導の方法原理
4. 生徒指導と学級活動
5. 学級づくりの実践論
6. 学級集団指導の方法
7. 生徒理解の方法
8. 生徒理解と道徳指導や教科指導との関係
9. 学校における教育相談の特色
10. 教育相談の理論
11. 進路指導の意義と方法
12. 進路指導で何を指導するかについて

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 生徒指導法（前期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 「いじめ」「体罰」「学級崩壊」の三つの問題について、事例をそれぞれ確認しながら考えることを通じて、生徒指導の基本的な考え方・技術を学ぶ。  |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 生徒指導の上で、現在最も大きな問題となっている「いじめ」「体罰」「学級崩壊」を、具体的事例を通じて考え、グループで討議する。討議をもとにしながら、対処方法やそうした事態を生まないようにするための様々な改革を考えていく。 |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | 配布資料による  |  |
|   | 参考文献  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・雑誌『生活指導』（月刊）</li> <li>・渡辺他『生徒指導の理論と実践』（樹村房）</li> <li>・竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』（東大出版）</li> <li>・竹内常一『「少年期」不在』（太郎次郎社）</li> <li>・坂本秀夫『体罰の研究』（三一書房）</li> <li>・ヘレン・コーウィー他『学校でのピア・カウンセリング』（川島書店）</li> <li>・尾木直樹『いじめっ子』（学陽書房）</li> </ul> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 試験と、随時課すレポートによる。  |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 『生徒指導』誌を毎月講読されたい。   |  |  |

1. 「問題行動」とは何か。何が「問題」であるのか。
2. 「いじめ」を考える (1) いじめの実態
3.       "               (2) 討議 いじめをどうしたらなくせるか
4.       "               (3) 討議 いじめへの取り組み
5.       "               (4) いじめをなくすために
6. 体罰を考える (1) 体罰の実態
7.       "               (2) 討議 体罰はどうしていけないのか
8.       "               (3) 体罰の諸問題
9. 学級崩壊を考える (1) 学級崩壊の実態
10.       "               (2) 討議 学級崩壊にどう取り組むか
11.       "               (3) 学級崩壊を考える
12. 試験

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 生徒指導法（前期） | 担当者名 | 佐 藤 利 明 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |  |                                    |  |
|---|--|------------------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>生徒指導は、学校教育において生徒一人一人が生きがいを感じ充実した学校生活ができるようにすることである。</p> <p>生徒のそれぞれがもつ個性の伸長をはかり、資質・生活態度の育成を目指し人間形成をはかる重要な機能をもっていることを理解する。</p>  |                                    |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>生徒指導の意義、原理及び領域論と機能論。</p> <p>生徒理解の方法、個別指導、集団指導、非行及び問題行動の対応。</p> <p>生徒指導と教科・領域の関連。</p> <p>生徒指導と進路指導、教育相談、地域社会との連携</p> <p>学校教育目標との関連、全教職員の共通理解と実践</p> <p>現・新学習指導要領との関連</p> |                                    |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | <p>「現代の生徒指導」文教書院</p> <p>プリント配布</p> |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | <p>生徒指導の手引（改訂版）文部省</p>             |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>定刻出席とレポート評定</p> <p>レポート提出 教務課一係あて 平成11年7月21日（水）まで</p>   |                                    |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>止むを得ず欠席の場合は、事前に欠席届と論作文（課題はその都度指示）を提出する。事後の場合はすみやかに同様提出する。</p>   |                                    |  |

1. 講義概要説明  
生徒指導の意義、原理及び領域論と機能論。
2. 生徒指導は時代の変遷でどう変ったか
3. 学校教育目標と生徒指導及び指導体制
4. 生徒指導の実際  
生徒理解の考え方とその実際
5. 教育課程と生徒指導
6. 個別指導と集団指導
7. 進路指導 教育相談
8. 非行と問題行動 事例と討議  
地域社会との連携
9. いじめ 事例と討議 指導方法  
信頼関係（生徒間、生徒教師）を得るための努力点
10. 登校拒否 事例と討議 指導の実際
11. 学級経営の実際
12. 現・新学習指導要領 生徒指導をめぐる諸課題  
レポート課題提示

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 生徒指導法（後期） | 担当者名 | 福 島 哲 夫 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |  |            |  |
|---|--|------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 生徒の悩みに向き合い、相談にのれる技量と人格を身につける。                |            |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 上記の目標を達成するため、実例・事例にできるだけ多く触れ、豊富な実習を通じて学んでいく。 |            |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | なし         |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献                             | 講義の中で紹介する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 出席と課題提出を重んじる。また、実習の出来も加算される。                 |            |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |  |            |  |

1. 「悩みを聴く」「相談にのる」とはということかについて講義。
2. 実例・事例にもとづいて学校内カウンセリングについて考える。
3. 出席者同士のカウンセリング実習
4. 出席者が提出したカウンセリング実習のテープと逐語録をもとに学校内カウンセリングについて考える。
5.       同       上
6.       "
7.       "
8.       "
9.       "
10.       "
11.       "
12.       "

|       |          |      |         |
|-------|----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教育実習（後期） | 担当者名 | 鳥谷部 志乃恵 |
|-------|----------|------|---------|

|   |  |                 |  |
|---|--|-----------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 教育実習の意義や目標、内容及び方法等について理解し、着実に教育実習が行なえるようにすること。また教職について研究し、将来の進路選択に生かせる効果的な教育実習を行なうことができるようにすること。   |                 |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 次の事項について取り扱う。<br><ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習の意義、目的</li> <li>・教育実習の内容と方法</li> <li>・学校の組織と教職員の仕事の専門性</li> <li>・授業へのとりくみ</li> <li>・教育実習生としての心得とサービスの在り方</li> </ul> |                 |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 『教育実習の指針』（獨協大学） |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   |                 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 出席とレポート提出によっておこなう。   |                 |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 教育実習の事前指導であるから原則として欠席は認めないが、事情によって欠席せざるを得ない場合は欠席届と小レポート提出を求める。   |                 |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 教育実習の意義や目的について
2. 教育実習の形態（観察・参加・実習）について
3. 学校の組織と運営について
4. 教職の専門性について
5. 授業へのとりくみと教材研究のすすめ方について
6. 指導案の構想
7. 授業展開のタクト
8. 発問や助言の創意工夫
9. 板書の活用、板書の仕方
10. 道徳・特別活動・学校行事へのとりくみ
11. 教育実習生としての心得とサービスの在り方
12. 教育実習期間を効果的に過ごすための工夫や留意事項

|       |          |      |       |
|-------|----------|------|-------|
| 科 目 名 | 教育実習（後期） | 担当者名 | 川 村 肇 |
|-------|----------|------|-------|

|   |  |                       |  |
|---|--|-----------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 教育実習に役立つ様々な技術と構えの習得を目的とする。   |                       |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>1. クラスづくりに役立つ「遊び」「ゲーム」等を実際に行ってみて、必要な技術を学ぶ。</p> <p>2. 参加者数によるが、可能であれば、一人一回模擬を行う。模擬授業を見学して、授業を見る目を養う。</p> |                       |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 本学免許課程係編集・発行『教育実習の指針』 |  |
|   | 参考文献   | 必要があれば随時授業中に指示する。     |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 平常点（出席点）による。   |                       |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 技術習得を目的にしているため、参加を重視する。遅刻、欠席は避けてほしい。   |                       |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. クラスづくりのために (1) 野外実習 Free fall / 人間椅子 / 巴鬼
2. " (2) 室内実習 Common tree
3. " (3) 野外実習 Blind walk
4. 授業実践ビデオから学ぶ
5. 模擬授業
6. "
7. "
8. "
9. "
10. "
11. "
12. "

|       |          |      |         |
|-------|----------|------|---------|
| 科 目 名 | 教育実習（後期） | 担当者名 | 小 川 一 郎 |
|-------|----------|------|---------|

|   |  |                        |  |
|---|--|------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>教育実習について、その概要を理解し、目的意識をもつてのぞめるようにする。そのため教育実習の意義や目的について、十分に理解させる。</p> <p>実習校に新風を吹き込み生徒に刺激を与えるために、実習にのぞむ心構え、生徒とのコミュニケーションのとり方などを重視し、授業を進める。さらに実習期間における仕事の内容を理解させ、十分に事前の準備ができるようにする。</p> |                        |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>教育実習の意義・目的について</p> <p>教師の仕事の性質について（教師と生徒の関係など）</p> <p>教師の資質とその形成について</p> <p>実習にのぞむための目的意識とその心構え</p> <p>学校の仕事の内容について</p> <p>学校の現代的課題について</p> <p>実習生の立場について</p>                         |                        |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | 「教育実習の指針」獨協大学          |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | 小川一郎編著『ホームルーム担任必携』文教書院 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 評価はレポートと授業への参加を考慮して決定する。   |                        |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 教育実習の事前指導なので、講座に出席することが大切である。教育実習が間近に迫るといろいろ不安や疑問をもつようになる。十分な準備と心構えをつくる必要がある。適宜、個人指導する。  |                        |  |

1. 教育実習 ・ が制度化された意義や目的について、また、この講座の概要について
2. 教師の仕事の性質、教師の資質について
3. 教育実習の意義・目的について 先輩実習生の感想、意見などについて
4. 教育実習全般の事前の準備や実習校との連絡、実習期間、事後の対応。心得と準備について
5. 教育実習の形態、(1)観察、(2)参加、(3)教壇実習について
6. 教育実習の仕事の内容、学校の教育活動の概要について
7. 研究授業への対応、教材研究について、特に、教材研究には多くの時間を必要とするので、その自覚と心構えについて
8. 学級担任としての学級経営と学級経営上の諸問題について
9. 学級担任としての生徒指導、進路指導について、最近、いじめ、登校拒否（不登校）、高校中途退学など対応のむずかしい問題が増加しているのでその対応について
10. 生徒理解の方法と生徒とのコミュニケーションについて
11. 教師として義務づけられている研修と法規について 教師としての服務や勤務など、必要な法規について
12. 教育実習の記録、反省など教育実習日誌の記録や毎日の指導教官との報告、連絡、相談について

|       |          |      |      |
|-------|----------|------|------|
| 科 目 名 | 教育実習（後期） | 担当者名 | 佐藤利明 |
|-------|----------|------|------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>教育行政のしくみ、公立・私立学校<br/>         学習指導要領・教育課程編成の基本的事項<br/>         よい授業の展開<br/>         生徒と生徒、生徒と教師のよい人間関係をつくる工夫<br/>         教師の学校での勤務状態を理解する。<br/>         一層充実した感動（充実感）ある教育実習に資する</p>   |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>都道府県・市町村教育委員会と学校。教職員の採用、服務監督。私立学校。<br/>         教育職員としての専門性。<br/>         学習指導要領の根拠と教育課程。<br/>         新学習指導要領のねらい。<br/>         よい授業をするための研究。学習指導案・指導の実際と評価。模擬授業。<br/>         教師の一日、職員会等各会への参加の心構え<br/>         学校教育の今日的課題。課題への対応。</p> |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | <p>「教育実習の指針」( 獨協大学教務部学務課免許課程係編集・発行 )<br/>         プリント配布</p> |  |
|   | 参考文献  |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>定刻出席とレポートの評定<br/>         レポート提出 教務課 1 係あて。平成12年1月21日（金）まで<br/>         レポート課題 最終時提示</p>   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>「指導者」を目指す意識を強くもち、充実した教育実習にするよう意欲をもって受講する。<br/>         止むを得ず欠席の場合は欠席届と論作文（課題はその都度掲示）をすみやかに提出する。</p>  |  |  |

1. 講義概要説明。学習指導要領等学校教育に関する関係法令の概要。  
都道府県・市町村教育委員会と公立学校。私立学校。教科書。
2. 教育職員の専門性（教職観、教師像、研究修養、授業等）
3. 現・新学習指導要領のねらい。幼・小・中・高等学校の一貫性ある教育。  
教育課程編成。目的と目標。
4. 年間授業計画と学習指導案の実際。  
指導案のいろいろ（様式、内容等）。
5. よい授業をするための教材研究、教育機器の活用。  
学習指導案のたてかた。
6. 指導方法、達成感・成功感・存在感等を味わわせる指導。学習形態。  
発問、板書事項、チョークの使い方、机間指導等。評価とその活用。
7. 生徒指導（特に心の教育ほか）生徒理解、教育相談、同和教育。学校事故。
8. 道徳教育のねらいと資料準備及び指導案のたてかた
9. 特別活動のねらいと特に学級（H.R）活動の指導の実際、短時間学級（H.R）活動の指導。
10. 教師の一日  
模擬授業（学級活動）
11. 職員会、学年会、教科会、朝の打合せ等への参加の心構え。校務分掌
12. 教育実習へ臨むことのまとめ。学校教育の今日的課題の討議と展望、  
レポート課題提示。

|       |       |      |         |
|-------|-------|------|---------|
| 科 目 名 | 日本史概説 | 担当者名 | 新 井 孝 重 |
|-------|-------|------|---------|

|   |  |      |   |      |  |
|---|--|------|---|------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>前期には、古代から中世の変革の「法則」を具体的な歴史叙述をたどるなかで学びとる。歴史を理論的、哲学的に学びたい。後期には、実際の授業が現場の先生によって、どのように行なわれているのか。授業実践の報告を読みながら考える。</p>   |      |   |      |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>戦後歴史学の主要な学説は、領主制理論というものが主軸になっている。奴隷制的経済制度を揚棄して、新たな経済制度である農奴制が形成されるが、そうした変革期中世農村のすがたを、村落共同体、武士団、荘園制などの歴史事項を通して学ぶ。<br/>歴史授業のくみたてと、そのための教材のあつかいかたを学ぶ。</p>        |      |   |      |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | <table border="1"> <tr> <td>テキスト</td> <td> <p>石母田 正『中世的世界の形成』(岩波文庫)<br/>歴史教育者協議会編『前近代史の新しい学び方』(青木書店)</p> </td> </tr> <tr> <td>参考文献</td> <td></td> </tr> </table> | テキスト | <p>石母田 正『中世的世界の形成』(岩波文庫)<br/>歴史教育者協議会編『前近代史の新しい学び方』(青木書店)</p> | 参考文献 |  |
| テキスト  | <p>石母田 正『中世的世界の形成』(岩波文庫)<br/>歴史教育者協議会編『前近代史の新しい学び方』(青木書店)</p>  |      |   |      |  |
| 参考文献  |  |      |   |      |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>評価は、後期の年度末試験の成績と出席状態にもとづいておこなうものとする。</p>  |      |   |      |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>大幅な遅刻のばあいは、入室を遠慮してもらいたい。(佳境へ入ったところで授業が攪乱されるから)</p>  |      |   |      |  |

|                            |   |
|----------------------------|---|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <p>1. 第1回目の授業。『中世的世界の形成』という書物のあつかうテーマ、叙述の構成を紹介して、これを読書することの学問的意義を論ずる。</p> <p>2. 第2回目の授業。第1章 藤原実遠（私営田領主としての藤原実遠の所領の成立。構造、特徴を説明）</p> <p>3. 第3回目の授業。第1章 藤原実遠（私営田経営の破綻の必然性、初期領主実遠の没落とその跡にあらわれる東大寺の支配をみる）</p> <p>4. 第4回目の授業。第2章 東大寺（Ⅰ）（古代の東大寺の財政的逼迫、畿内近国荘園としての黒田荘建設運動の様態をみる）</p> <p>5. 第5回目の授業。第2章 東大寺（Ⅱ）（東大寺の公領侵略にあたっての独特の古代理論を、荘の住民の身分規定を通してみる）</p> <p>6. 第6回目の授業。第2章 東大寺（Ⅲ）（古代都市奈良に所在する東大寺は本質的に農村と敵対する法をもっていた。古代法と中世法の二つの法をみる）</p> <p>7. 第7回目の授業。第3章 源俊方（Ⅰ）（農村の支配者源俊方について、彼の家系、生活の形態、精神、感情などをみる）</p> <p>8. 第8回目の授業。第3章 源俊方（Ⅱ）（源俊方とその一統からなる在地の武士団を、存在構造・惣領制などを通してみる）</p> <p>9. 第9回目の授業。第3章 源俊方（Ⅲ）（源俊方は農村の領主的支配権を守るために東大寺と戦って敗れる。その後農村の武士は封建的領主への成長に失敗）</p> <p>10. 第10回目の授業。第4章 黒田悪党（Ⅰ）（武士の敗北のあと、東大寺は悪僧を荘園に下向させて武装統治にあたる。東大寺によって古代は再建された）</p> <p>11. 第11回目の授業。第4章 黒田悪党（Ⅱ）（荘園支配の矛盾に遭遇する寺家は新しい統治方式を生みだすが、それがいかなるものであったかをみる）</p> <p>12. 第12回目の授業。第4章 黒田悪党（Ⅲ）（東大寺に反抗する在地の武士が悪党としてしか存在しえなかったことの意味を考える。）</p> <p>13. &lt;古代国家の形成&gt; (1) 原子古代の授業プランと授業の位置づけ (2) 東アジア世界との関連 (3) 地域から日本史の全体像へ</p> <p>14. 前回のつづき (4) 墾田永年私財法と初期荘園の取り扱い (5) コメント</p> <p>15. &lt;古代文化の特質&gt; (1) 国風文化の特徴 (2) 平安貴族は何を食べたか</p> <p>16. 前回のつづき (1) 授業の反省 (4) コメント</p> <p>17. &lt;中世社会の成立&gt; (1) 古代荘園から中世荘園へ (2) 加藤・今野・木村の批判</p> <p>18. 前回のつづき (3) 公田制から荘園公領制へ (4) コメント</p> <p>19. &lt;中世国家と東アジア&gt; (1) 「歴史地理教育」にみる「元寇」学習 (2) 生徒の「元寇」認識と授業の展開</p> <p>20. 前回のつづき (3) 歴史研究と歴史教育の課題 (4) コメント</p> <p>21. &lt;中世文化史&gt; (1) 鎌倉新仏教のとらえ直しと授業</p> <p>22. 前回のつづき (2) 南北朝文化の授業 (4) コメント</p> <p>23. &lt;中世の民衆&gt; (1) 生き生きと時代を生きぬく中世の民衆 (2) 楽しくわかる中世の学習・いざ鎌倉・阿弖河（あてがわ）の農民・新しい村</p> <p>24. (3) 生きる力を励ます歴史学習を (4) コメント</p> <p>備考 以上の項目はテキストの項目をそのまま転載した。各項目にしたがって、吟味し、勉強していく。</p> |
|----------------------------|---|

|       |           |      |      |
|-------|-----------|------|------|
| 科 目 名 | 外国史概説（前期） | 担当者名 | 熊谷哲也 |
|-------|-----------|------|------|

|             |   |          |  |
|-------------|---|----------|--|
| 講義の目標       | <p>西アジアの歴史について学ぶ。ある意味では、イスラーム世界は我々の視野から最も遠い世界と言えるかも知れない。そこに生きる人々について、我々の今日的な問題関心と、彼らの社会や文化に対する興味を掘り下げてみたい。</p> <p>外国史概説（前期）と外国史概説（後期）を、それぞれ単独で受講しても、両方をあわせて通年で受講しても、どちらも不都合がないよう配慮する。</p> |          |  |
| 講義概要        | <p>歴史を理解しようとする姿勢は、現代的な問題関心を表裏一体であるべきだ。ここではまずパレスチナ問題や旧ユーゴーの問題などを知ることによって、現代的な関心を高めることから始めたい。イスラーム教にかんする基本的な知識もあわせて理解する。</p>  |          |  |
| 使用教材        | テキスト  | とくに定めない。 |  |
|             | 参考文献  | 授業で指示する。 |  |
| 評価方法        | 出席点と筆記試験。   |          |  |
| 受講者に対する要望など |   |          |  |

1. オリエンテーション。イスラームの基本事項について説明する。
2. ユダヤ教・キリスト教とイスラーム教との関係について理解する。これら3者の関係はイスラームを理解するために重要である。
3. 預言者ムハンマド(マホメット)の教え、コーラン、ハディースについて理解する。
4. 預言者によって建設された宗教共同体が、やがて広大なイスラーム世界として拡大する様相を概観する
5. パレスチナ問題 第一次中東戦争にいたる過程とその結果について理解する。
6. パレスチナ問題 第三次中東戦争(六日間戦争)にいたるまでを理解する。
7. パレスチナ問題 第四次中東戦争とその後の中東和平の動きについて理解する。
8. パレスチナ問題 その後、現在にいたるまでのパレスチナの状況を概述する。
9. イスラーム原理主義(復興主義)とその問題について述べる。パレスチナ問題との関連も理解されるだろう。
10. バルカンの歴史について、オスマン帝国の属領であった時代に溯って概述する。
11. 旧ユーゴスラビアの民族問題について考察する。
12. まとめをおこなう。

|       |           |      |      |
|-------|-----------|------|------|
| 科 目 名 | 外国史概説（後期） | 担当者名 | 熊谷哲也 |
|-------|-----------|------|------|

|             |   |          |  |
|-------------|---|----------|--|
| 講義の目標       | <p>西アジアの歴史について学ぶ。ある意味では、イスラーム世界は我々の視野から最も遠い世界と言えるかも知れない。そこに生きる人々について、我々の今日的な問題関心と、彼らの社会や文化に対する興味を掘り下げてみたい。</p> <p>外国史概説（前期）と外国史概説（後期）を、それぞれ単独で受講しても、両方をあわせて通年で受講しても、どちらも不都合がないよう配慮する。</p> |          |  |
| 講義概要        | <p>宗教・文化・社会などさまざまな側面からイスラーム世界を捉えることを目標とする。人々の生活のさまざまな部分にスポットあて、毎回テーマを変えてすすめてゆく。最後にイスラーム世界とヨーロッパ世界との関連についても検討してみたい。</p>  |          |  |
| 使用教材        | テキスト  | とくに定めない。 |  |
|             | 参考文献  | 授業で指示する。 |  |
| 評価方法        | 出席点と筆記試験。   |          |  |
| 受講者に対する要望など | 後期から のみを受講する者は、9月の初回の授業を欠席しないこと。  |          |  |

1. イスラム教の基本事項について確認する。オリエンテーションをかねる。
2. イスラム世界の儀礼について、日常生活における慣習も含めて説明する。
3. ヨーロッパの近代科学のさきがけとなったアラビア科学について理解する。
4. 中世イスラム世界の哲学について、神秘主義とのかかわりも含めて理解する。
5. アラブ文学について、例をあげて述べる。
6. イスラム世界における女性と、現代的な問題関心について述べる。
7. イスラムが築き上げた都市の文明と、そこにみられる多様な人々によるネットワークを理解する。
8. ヨーロッパからみたイスラム世界 中世ヨーロッパ世界にみられたイスラム観について考察する。
9. ヨーロッパからみたイスラム世界 エドワード・サイードの唱えるオリエンタリズムについて、それへの批判も含めて紹介する。
10. 世界史の中のイスラム世界 世界史的な視野のなかで、イスラム世界をどのように位置付けるべきかという、いくつかの見解を紹介する。
11. 世界史の中のイスラム世界
12. まとめをおこなう。

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 外国史概説（後期） | 担当者名 | 古 川 堅 治 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |   |                                       |  |
|---|---|---------------------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 歴史学と歴史教育の接点、そして両者の関係の仕方を、最新の研究成果を念頭におきながら概説的に把握しつつ、歴史の教え方についてどのように考えるべきかを外国史 - 本年度はヨーロッパ古代史 - を中心に理解することを目標とする。 |                                       |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 講義は概説的に説明するが、積極的な議論が湧き上がることも期待したい。授業では、アート・ホームな雰囲気の中にも、何よりも歴史の面白さと厳しさを伝えていきたいと考えている。                            |                                       |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | 特に使用するという事はしない。資・史料をプリントとして配布。        |  |
|   | 参考文献  | 最初の授業で「参考文献一覧表」を配布するので、適宜、図書館で参考にする事。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 基本的にはレポート提出により評価するが、出席や議論への参加度合も考慮する。   |                                       |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 教員を志望して授業に臨むはずであるから、個々人が主体的・積極的に授業を作り上げるという姿勢で参加して欲しい。  |                                       |  |

1. 「はじめに」  
年間授業計画の概要と授業の進め方等について詳しく説明する。
2. 「地中海世界の形成」  
古代、東地中海世界が形成されていく諸要因とその構造について解説する。
3. 「ミケーネ世界の崩壊からポリス社会への移行（その1）」  
「海の民」をめぐる問題と「トロイア戦争」について。
4. 「ミケーネ世界の崩壊からポリス社会への移行（その2）」  
「暗黒時代」の評価をめぐる問題について。
5. 「ポリスの形成過程」  
前時代と連続している地域と断絶している地域での場合について。
6. 「ポリス社会の特質とその歴史的発展」  
アテネとそれ以外の地域でのポリス社会のあり方について。
7. 「ポリス社会からヘレニズムの領域国家へ」  
ポリスはなぜ衰退したのか。なぜ、ヘレニズム領域国家が支配的となり得たか、について。
8. 「ローマとギリシア」  
ローマの都市的発展と共和制の構造について。
9. 「ローマ市民の国家と社会」  
ローマ人の行政への関与、家族生活について。
10. 「ローマ帝国の形成とその構造」  
なぜローマは広大な支配を及ぼし得たのか、また、その支配構造とはどのようなものなのかについて。
11. 「ローマ帝国の滅亡と新しい時代への移行」  
ローマ帝国の滅亡の原因論と新しい時代への移行のプロセスを問う。
12. 「まとめ ～歴史を学ぶことの意味～」  
なぜ、歴史を学ぶのか、について。

|       |           |      |         |
|-------|-----------|------|---------|
| 科 目 名 | 外国史概説（前期） | 担当者名 | 久 慈 栄 志 |
|-------|-----------|------|---------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>「和魂洋才」という言葉が示すように我国とヨーロッパとのつながりはきわめて強く、現在の日本の政治・経済的諸制度は言うに及ばず、日本人の人格形成までも深く入り込んでいく観すらある。</p> <p>統一的経済圏の創設や新通貨「ユーロ」の発行等で、「復権」をかけるヨーロッパであるが、その真の理解は、我国の発展のみならず、国際的協調・平和の実現に大きく貢献するものと考えらる。</p> |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>ヨーロッパの「近代化の過程」を多角的に考察し、その功罪を論じたい。<br/>また、適宜時事問題を取りあげ、問題意識の啓発に努めたい。</p>   |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | <p>特に指定しないが下記の参考文献中 1～2 冊は目を通してほしい。</p>  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・西嶋定生、木村尚三郎他編「世界歴史の基礎知識」(1)(2)有斐閣</li> <li>・ウォーラスティン「新版 史的システムとしての資本主義」岩波書店</li> <li>・猪口孝「社会科学入門」中公新書</li> <li>・前川貞次郎「歴史を考える」ミネルヴァ書房</li> </ul> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>最終回の授業時に試験を実施する。</p>   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>同時代人的視点で歴史事象を捉える姿勢を身につけてもらいたい。</p>   |  |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <p>1. オリエンテーション</p> <p>2. 「近代」の概念について<br/>ヨーロッパ中心史観に起因する「近代」の概念について考察する。</p> <p>3. 同 上</p> <p>4. 市民革命<br/>英・仏両革命における共通性と異質性を分析し、両国の国民性を考える。</p> <p>5. 同 上</p> <p>6. 産業革命<br/>イギリスの経済的優位と諸国間の新たな対立について考える。</p> <p>7. 「近代」総括<br/>ヨーロッパにおける近代化過程を概観し、その功罪を論ずる。</p> <p>8. 同 上</p> <p>9. 帝国主義から両大戦へ<br/>経済的諸矛盾の「武力による打開」と「差別意識」について考える。</p> <p>10. 同 上</p> <p>11. 今後の課題<br/>21世紀、地球全体が直面する「人口問題」「環境破壊」について問題提起する。</p> <p>12. 予備</p> |
|----------------------------|--|

|       |       |      |         |
|-------|-------|------|---------|
| 科 目 名 | 地理学概説 | 担当者名 | 原 田 洋一郎 |
|-------|-------|------|---------|

|   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>地理学における基本的な概念を理解するとともに、現実の事象の中に問題を発見し、考察するという営みを通じて、地理的なみかた、考えかたを身につけることを目的とする。</p>  |   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>まず、地理学における基本的な概念や方法について学び、それを踏まえた上で、個別具体的な事例について検討する。取り上げられるテーマに関しては、年間計画を参照のこと。</p> |   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | <p>テキストは特に指定しないが、地図帳の持参を勧める。</p>                  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | <p>講義の際に配付する資料プリントのなかで参考文献を示すので、必要に応じて参照されたい。</p> |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>前後期のレポートと出席状況によって評価する。</p>   |   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>特になし</p>   |   |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 導入（講義の概要）</li> <li>2. 景観(1)</li> <li>3. 景観(2)</li> <li>4. 環境(1)</li> <li>5. 環境(2)</li> <li>6. 地域(1)</li> <li>7. 地域(2)</li> <li>8. 分布とパターン(1)</li> <li>9. 分布とパターン(2)</li> <li>10. 伝播(1)</li> <li>11. 伝播(2)</li> <li>12. 前期のまとめ</li> <li>13. 農耕の起源と伝播</li> <li>14. 伝統的農村景観(1)</li> <li>15. 伝統的農村景観(2)</li> <li>16. 近代的農業と農村集落の変容</li> <li>17. 工業立地の主要因</li> <li>18. 日本の工業地域</li> <li>19. 資源開発と地域変化(1)</li> <li>20. 資源開発と地域変化(2)</li> <li>21. 都市の発達</li> <li>22. 都市の内部構造とその変化</li> <li>23. 人口分布と移動</li> <li>24. 後期のまとめ</li> </ul> |
|----------------------------|--|

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 地誌学概説（前期） | 担当者名 | 山 本 充 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>特定の地域を研究対象とする地誌学は、地理学の中で重要な位置を占めている。ここでは、地誌学における重要な概念「地域」を理解した上で、地域分析の手法を学び、地誌学における地域のみかたを身につけることを目的とする。</p>   |   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>まず、地理学の中における地誌学の位置、ならびに地誌学における重要な概念「地域」とこの「地域」を考察する方法を理解する。同時に地域を扱う上で必要な文献や地図類の種類と利用法、地域の分析方法についても実習をまじえて習得する。地誌学では、これらをふまえて、ヨーロッパを事例としてとりあげ、自然環境、民族と国家、都市と農村などの多様性とそれらの相互関係を考察することを通して、一般的な地域のみかたを学ぶ。</p> |   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | <p>とくに教科書は指定しない。毎回、資料を配布し、そこで参考文献を提示するので、それを参照されたい。理解を助けるために、地図帳を持参することをすすめる。</p> |  |
|   | 参考文献  |   |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>レポートと出席状況による。</p>  |   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>地誌学 をあわせて受講することが望ましい。</p>  |   |  |

1. 講義の概要説明
2. 地域概念の把握（1）：地理学における地域、地域研究としての地誌学
3. 地域概念の把握（2）：地域概念の変遷、地誌学における地域の定義
4. 地域分析の基礎（1）：地域文献・資料・統計の所在と検索
5. 地域構造の把握（1）：地域を考察する視点1（地域内の多様性の把握）
6. 地域構造の把握（2）：地域を考察する視点2（事象間の関連性の把握）
7. 地域分析の基礎（2）：地図の種類と利用、主題図作成の基礎
8. 地域分析の手法（1）：主題図作成を通じた地域内の多様性の把握
9. 地域分析の手法（2）：統計分析を通じた事象間の関連性の把握
10. 地域分析の手法（3）：地誌学における多変量解析の利用
11. 地域分析の手法（4）：地誌学におけるGIS地理情報システムの利用
12. 地域研究の意義と応用

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 地誌学概説（後期） | 担当者名 | 山 本 充 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 地誌学 で示された地域を考察する 2 つの視点、「地域内の多様性の把握」、「事象間の関連性の把握」を用いて、ヨーロッパという一つの地域をみる試みを行なう。これを通して、地誌学における地域のみかたにふれてみることを目的とする。                                    |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 自然環境や農業にみられる北と南の差異、言語や宗教上の東西のコントラスト、中心と周辺の格差、及び、国家、地域という異なるスケールの地域間の関係の変化など、ヨーロッパ間の多様性を把握し、さらに、こうした多様性を生み出す要因を他の事象との関連で明らかにしようと試みる中で、一般的な地域のみかたを学ぶ。 |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | とくに教科書は指定しない。毎回、資料を配布し、そこで参考文献を提示するので、それを参照されたい。理解を助けるために、地図帳を持参することをすすめる。 |  |
|   | 参考文献  |  |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | レポートと出席状況による。   |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 地誌学 を受講していることが望ましい。   |  |  |

1. 講義の概要説明。地誌学における地域のみかた。
2. 一つの地域としてのヨーロッパ：ヨーロッパとは？
3. アルプスの北と南（1）：自然環境のコントラスト
4. アルプスの北と南（2）：伝統的農業とその変化
5. ケントウム・サテム線 - ヨーロッパの東西 - （1）：集落・民家形態の多様性
6. ケントウム・サテム線 - ヨーロッパの東西 - （2）：言語と宗教の分布
7. ケントウム・サテム線 - ヨーロッパの東西 - （3）：少数民族集団の諸問題
8. EU - 国家 - 地域（1）：国家の分裂と統合
9. EU - 国家 - 地域（2）：EUの形成と統合の深化、EUにおける地域の役割
10. ヨーロッパのバナナ - 中心と周辺 - （1）：ヨーロッパ都市の発達史
11. ヨーロッパのバナナ - 中心と周辺 - （2）：産業の進展と都市・都市システムの変容
12. ヨーロッパの地域構造 - ヨーロッパをどうとらえるか？講義のまとめ

|       |            |      |         |
|-------|------------|------|---------|
| 科 目 名 | 地理学調査法（前期） | 担当者名 | 松 本 栄 次 |
|-------|------------|------|---------|

|   |  |             |  |
|---|--|-------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 調査地域に赴いて資料を収集するフィールドワークが地理学の調査研究のもっとも基本的な作業であり、地理教育においても地域の調査は重要視されている。この講義では、とくに地域の理解に欠かせない自然環境のフィールドワークについて、その準備・実行・資料整理方法などを解説する。 |             |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 自然環境の調査に必要な基礎的テクニックについて講義および簡単な実習を通じて解説した後、さまざまな自然環境に関する具体的な調査研究の事例を紹介する。  |             |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 使用しない。      |  |
|   | 参考文献   | 授業中に適宜紹介する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 学期末のレポートと出席状況を総合して判断する。  |             |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 特になし。  |             |  |

1. 序説：自然環境の構造と自然地理学研究の方法
2. 地理学調査の基本的資料1：地図の利用
3. 地理学調査の基本的資料2：空中写真・衛星写真の利用
4. 地図・空中写真実習
5. 測定の原理と簡易測量法
6. 土地の構成物質（岩石・堆積物・土壌）の調査
7. 平野地域における土地条件の調査
8. 山地・丘陵地域における土砂災害の調査
9. 海岸地域における地形変化の調査
10. 自然環境の総合的調査1：地生態系各要素の調査法
11. 自然環境の総合的調査2：熱帯地域における地生態系の調査研究
12. まとめ

|       |       |      |         |
|-------|-------|------|---------|
| 科 目 名 | 社会学概論 | 担当者名 | 有 吉 広 介 |
|-------|-------|------|---------|

|   |  |                   |  |
|---|--|-------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>中学・高校の社会科教育のなかで取りあげられる関係事項を中心として、現代の社会生活を理解するための基礎的な考え方を講義する。</p>   |                   |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>まず、社会的存在としての人間の諸相を考えるための基本的な概念を取りあげ、そのなかで、人間、社会および文化の相互関係を考察する。ついで、社会生活の基本単位といわれる家族集団が、近代化のさまざまな過程のなかでどのように変化してきたかを問題にする。特に核家族化の問題点を考察する。引き続いて、近代から現代にわたって展開してきた社会の産業化、都市化、大衆化、官僚制化、学歴社会化、情報化、および福祉化の諸現象について逐次ふれながら、現代の社会問題の基礎を明らかにする。最後に、今日解決をせまられている高齢社会の諸問題の背景に、現代社会のさまざまな構造的特質があることを指摘する。</p> |                   |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | <p>プリントを配布する。</p> |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | <p>適時紹介する。</p>    |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>前期および後期の終わりに提出を求めるレポートで評価する。</p>  |                   |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |  |                   |  |

1. 社会行動の構造
2. 社会集団の構造と機能
3. 人間、社会、文化の相互関係
4. 家族の構造と機能
5. 家族制度・核家族化
6. 社会の産業化
7. 職業社会・雇用社会
8. 官僚制化
9. 大衆社会
10. 社会の階層化
11. 日本人の「中」意識の背景
12. 前期講義の補足
13. 都市化
14. 都市問題
15. 新しいコミュニティ
16. 学歴社会の性格
17. 日本の近代化と学歴尊重
18. 社会の情報化
19. 社会の福祉 生活の質の重視
20. 日本人の生活時間の使い方
21. 社会の高齢化
22. 高齢社会に対する日本人の意識
23. 高齢社会への対応
24. 後期講義の補足

|       |      |      |       |
|-------|------|------|-------|
| 科 目 名 | 哲学概説 | 担当者名 | 河 口 伸 |
|-------|------|------|-------|

|   |   |                        |  |
|---|---|------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>昨今、哲学の復権が唱えられ、自分探しの一環として哲学が一種の流行となっているが、それらをも包摂し相対化する視点こそが、今求められている。一般教養としての哲学史的知識も教職に必要であるが、教師として以前に、一人の人間として真摯に生きるために「哲学」が持つ意義を考えてもらいたい。</p>   |                        |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>西欧思想を歴史的に辿ることが、本講義の概要であるが、そこには二つの偏りが存在していることを意識しつつ論じて行きたい。西欧哲学としての偏りと明治以降の輸入哲学としての偏りとである。哲学を、ギリシア起源の「学」としてのみ捉えるのではなく、幅広く「思想」として捉え、政治・社会・宗教・歴史・科学等への影響をも視野に入れて論じたい。</p> <p>個々の思想家の経歴や思想の細部の紹介は、テキストに譲り、彼らとその思想を形成した動機や課題、歴史的 position 付けなどを重視して論じる。</p> |                        |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 『精神史としての哲学史』 角田幸彦編 東信堂 |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | 講義の際に随時指示する。           |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する。出席が不良の者は評価に値しない。出欠は毎回とる。</p>  |                        |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>講義に唯出席しているだけではなく、またノートをとるだけでもなく、自ら考えることを要望したい。</p>   |                        |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 哲学とは何か(1)
2. ソクラテス以前
3. ソクラテス
4. プラトン
5. アリストテレス
6. スコラ哲学
7. ルネサンスと宗教改革
8. 科学革命
9. 社会契約説
10. 啓蒙主義
11. 合理論と経験論(1)
12. 合理論と経験論(2)
13. カント
14. ドイツ観念論
15. キルケゴール
16. ニーチェ
17. マルクス
18. フッサール・ハイデッガー・ヤスパース(1)
19. フッサール・ハイデッガー・ヤスパース(2)
20. 歴史主義・解釈学
21. ウィトゲンシュタイン
22. 構造主義
23. 言語哲学
24. 哲学とは何か(2)

|       |       |      |         |
|-------|-------|------|---------|
| 科 目 名 | 倫理学概論 | 担当者名 | 中 島 文 夫 |
|-------|-------|------|---------|

|                       |  |                                  |  |
|-----------------------|--|----------------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>高等学校で「倫理」を教えるのに必要な基礎的教養を得させることを目標とし、併せて、中学校において「道徳教育」を実践するための精神的基盤の確立にも資するよう配慮する。</p>                     |                                  |  |
| 講 義 概 要               | <p>1．倫理学とはどういう学問であるか。学問の全体系の中でどういう位置を占めるか。<br/> 2．主要概念 この中で、思想上重要な思想家の学説にも触れることになる。<br/> 3．現代における倫理的諸問題。</p> |                                  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | <p>使用しない。ただし、レジュメのプリントを配布する。</p> |  |
|                       | 参考文献   | <p>必要に応じて随時指示する。</p>             |  |
| 評 価 方 法               | <p>前・後期共、筆記試験を行う予定。出欠は毎回点検し、評価の一要素とする。甚しく欠席の多い者には単位を与えない。</p>  |                                  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>欠席・遅刻を当然の権利と考えることなく、欠席はもとより遅刻もしないように心がけ、授業中の私語を慎むなど、礼儀正しい態度を望む。</p>                                       |                                  |  |

1. 倫理学とは何か。
2. 人間存在の個別的原理と普遍的原理
3. 主体(1)
4. 主体(2)
5. 主体(3)
6. 共同体(1)
7. 共同体(2)
8. 規範(1)
9. 規範(2)
10. 規範(3)
11. 価値(1)
12. 価値(2)
13. 価値(3)
14. 道徳意識(1)
15. 道徳意識(2)
16. 徳と義務
17. 行為
18. 自由(1)
19. 自由(2)
20. 愛
21. 生と死
22. 現代社会の倫理的諸問題(1)
23. 現代社会の倫理的諸問題(2)
24. 現代社会の倫理的諸問題(3)

|       |       |      |       |
|-------|-------|------|-------|
| 科 目 名 | 宗教学概論 | 担当者名 | 河 口 伸 |
|-------|-------|------|-------|

|   |  |                       |  |
|---|--|-----------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>戦後教育が宗教について意識的に或いは無意識的に避け続けて来た為、現代の日本人は宗教に関して一種の「真空状態」に置かれており、そこから様々な問題が昨今生じて来ている。そこで本講義は、宗教学の学的体系性よりも、むしろ諸宗教の歴史と現在についての一般的概括的知識を得られるようにすることを重点とする。更に教職科目であることにも鑑み、宗教教育のあり方についても論じたい。</p> |                       |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>前期は、洋の東西、今昔を問わず世界史上の諸宗教の歴史と現在について説明し、宗教の果たして来た役割・問題点について考えてもらう。後期は、日本の宗教の歴史と、日本人の宗教的心性の形成にまず触れ、その後に日本や欧米の先進諸国において宗教集団が現在持っている意義や問題点を論じ、宗教的諸概念についての理解を深めた上で、宗教教育の是非・可能性を論じる。</p>           |                       |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 特になし。必要に応じてプリントを配布する。 |  |
|   | 参考文献   | 講義の際に随時指示する。          |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>履修者の数によって変更はあり得るが、基本的には次の通り。前後期の定期試験、夏冬各1回のレポート提出、出席点を総合的に評価する。出席が不良の者は評価に値しない。出欠は毎回とる。</p>   |                       |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>講義に唯出席しているだけではなく、またノートをとるだけでもなく、自ら考えることを要望したい。</p>  |                       |  |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要の説明及び宗教とは何か(1)</li> <li>2. 神話と宗教</li> <li>3. ユダヤ教</li> <li>4. キリスト教(1)</li> <li>5. キリスト教(2)</li> <li>6. キリスト教(3)</li> <li>7. イスラム教(1)</li> <li>8. イスラム教(2)</li> <li>9. 仏教(1)</li> <li>10. 仏教(2)</li> <li>11. ヒンドゥ教</li> <li>12. 儒教及び道教</li> <li>13. 日本の宗教の歴史と現在(1)</li> <li>14. 日本の宗教の歴史と現在(2)</li> <li>15. 日本の宗教の歴史と現在(3)</li> <li>16. 日本の宗教の歴史と現在(4)</li> <li>17. 宗教集団の諸問題(1)</li> <li>18. 宗教集団の諸問題(2)</li> <li>19. 宗教上の諸概念(儀礼、戒律、修行など)(1)</li> <li>20. 宗教上の諸概念(儀礼、戒律、修行など)(2)</li> <li>21. 学校教育と宗教(1)</li> <li>22. 学校教育と宗教(2)</li> <li>23. 宗教とは何か(2)</li> <li>24. 宗教学の課題</li> </ul> |
|----------------------------|--|

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 図書館概論（前期） | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |   |                                |  |
|---|---|--------------------------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>図書館とは、人間の様々な活動に、各種の資料・情報・活動を通しての様々な形態・方法をもって、対応していく社会的施設である。その様態を社会との関係において述べる。いわゆる図書館入門である。</p>                   |                                |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>まず自分たちの生活のなかでの図書館体験を再確認することを出発点とする。そして、人間の様々なニーズに応ずるものとして図書館の機能および役割を検討し、ついで各論的に各種図書館をみて、全体としての図書館の構造をあきらかにする。</p> |                                |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | <p>塩見昇『図書館概論』日本図書館協会、1998年</p> |  |
|   | 参考文献  | <p>適宜指示する。</p>                 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | <p>学年末試験</p>  |                                |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | <p>常日頃、種々と図書館を使いこなしてみること</p>  |                                |  |

1. オリエンテーション
2. 生活のなかでの図書館
3. 図書館の理念
4. 図書館行財政
5. 公共図書館
6. 学校図書館
7. 大学図書館
8. 専門図書館
9. 国立図書館
10. 図書館のネットワーク
11. 図書館関係団体 ( LA、ALA、JLA、SLA、IFLA )
12. まとめ

|       |            |      |       |
|-------|------------|------|-------|
| 科 目 名 | 図書館サービス経営論 | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|------------|------|-------|

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 住民の利用を前提に設立された公共図書館のサービス活動に焦点を当て、そのあり方ならびにすすめ方について述べる。その活動内容は多岐にわたるが、それらをいくつかのカテゴリに分けて、それを実現するための経営的な取り組みを通して、図書館サービスの全体構造をあきらかにする。 |  |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 住民サービスのために設けられた公共図書館の成立、そのサービスの展開過程を展望しながら、そのサービスの具体的な提供のあり方を、効率的な図書館の経営という観点からみていく。  |  |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | なし   |  |
|   | 参考文献  | 『中小都市における公共図書館の経営』 日本図書館協会 1963年<br>その他 適宜指示 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 期末試験  |  |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | できうるかぎり多くのサービス体験をすること   |  |  |

1. 公共図書館の成立 - 資料保存から資料活用へ
2. 館内閲覧
3. レファレンス・サービス
4. 児童サービス
5. 各種のハンディをもつ人びとへのサービス
6. 館外貸出 - 個人・団体貸出の仕組
7. 自動車文庫
8. 各種集会活動
9. 図書館経営の基本的な考え方
10. 図書館長の役割
11. 職員と組織
12. 予算・経理・物品会計
13. 施設管理
14. 図書館関係法規
15. 相互協力とネットワーク
16. まとめ

|       |         |      |       |
|-------|---------|------|-------|
| 科 目 名 | 情報サービス論 | 担当者名 | 福 田 求 |
|-------|---------|------|-------|

|                       |   |         |  |
|-----------------------|---|---------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>本講義での情報サービスとは、図書館の情報提供機能を具体化するサービス全般のことをいうが、これにはレファレンスサービスやカレントアウェアネスサービス、さらにはCD-ROMやオンラインの検索サービス等、さまざまなサービスが含まれる。本講義ではこの情報サービスの総合的な理解を目指し、情報サービスに関する解説と演習を行う。</p> |         |  |
| 講 義 概 要               | <p>前期では、図書館の情報サービスについての基本的な事項を解説する。また後期においては主に、情報サービス（特にレファレンスサービス）の実践的能力を養成するために、参考図書等さまざまな情報源を用いた検索および回答の演習を行う。</p>   |         |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 指定しない。  |  |
|                       | 参考文献  | 適宜紹介する。 |  |
| 評 価 方 法               | 前期：レポート。後期：学年末試験。   |         |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 受講者確認のため第1回の授業には「必ず」出席すること。   |         |  |

|                            |   |
|----------------------------|---|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション：受講者の確認・決定。年間予定、授業方法等の注意事項について説明。</li> <li>2. 情報サービスの概要</li> <li>3. 情報サービスの種類(1)：基本的サービス</li> <li>4. 情報サービスの種類(2)：発展的サービス</li> <li>5. 情報源の種類</li> <li>6. 情報ニーズ論</li> <li>7. 情報サービスにおける検索と回答</li> <li>8. 情報サービス管理論</li> <li>9. 事実検索の情報源(1)：情報源の種類、辞書</li> <li>10. 事実検索の情報源(2)：事典、便覧・図鑑</li> <li>11. 事実検索の情報源(3)：歴史、統計、地理、人物の情報</li> <li>12. 前期のまとめ</li> <li>13. 文献検索の情報源(1)：情報源の種類、書誌</li> <li>14. 文献検索の情報源(2)：目録、記事索引</li> <li>15. 情報サービスにおけるデータベース利用</li> <li>16. 情報源の評価</li> <li>17. 情報源の組織</li> <li>18. 情報源の作成</li> <li>19. レファレンスプロセス</li> <li>20. 情報検索と回答の実際(1)：情報源、ことば</li> <li>21. 情報検索と回答の実際(2)：ことがら</li> <li>22. 情報検索と回答の実際(3)：日時、地理、人物情報</li> <li>23. 情報検索と回答の実際(4)：書誌情報</li> <li>24. まとめ</li> </ol> |
|----------------------------|---|

|       |            |      |         |
|-------|------------|------|---------|
| 科 目 名 | 情報検索演習（前期） | 担当者名 | 高 柳 敏 子 |
|-------|------------|------|---------|

|   |   |      |                                   |      |                                      |
|---|---|------|-----------------------------------|------|--------------------------------------|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>情報検索システムの一連の流れの中で、蓄積段階として、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベース等を理解し、続いて検索段階として、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価等を理解する。</p> <p>検索式を作成する、シソーラスを利用する、索引との照合をする、検索結果を得るといった過程では、オンラインやCD-ROM等によるデータベース検索の実習をできるだけ多く体験し、実践的な能力を養うことを目指す。</p>  |      |                                   |      |                                      |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>情報検索システムの蓄積段階および検索段階を概観する。蓄積段階では、一次資料から二次資料への情報の加工の過程で、情報の入手、主題分析、検索キーの作成、索引、データベースといった処理項目を、検索段階では、情報要求、検索質問、検索式、シソーラスの利用、索引との照合、検索結果、検索の評価といった処理項目を順を追って解説する。検索式の解説では演算子を使用した検索条件の表現方法を、またシソーラスについては、その目的とシソーラスの構成を、検索の評価では再現率と適合率について学ぶ。</p> <p>実践的な情報検索能力を養うために、オンライン検索では、インターネット上の各種情報検索システムをできるだけ活用し、CD-ROMを使用した検索では、最近のマルチメディア事典や辞書等も扱ってみる。</p> |      |                                   |      |                                      |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | <table border="1"> <tr> <td>テキスト</td> <td>緑川信之編「情報検索演習」新現代図書館講座7、東京書籍、1998.</td> </tr> <tr> <td>参考文献</td> <td>細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 .</td> </tr> </table>  | テキスト | 緑川信之編「情報検索演習」新現代図書館講座7、東京書籍、1998. | 参考文献 | 細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 . |
| テキスト  | 緑川信之編「情報検索演習」新現代図書館講座7、東京書籍、1998.   |      |                                   |      |                                      |
| 参考文献  | 細野 公男 編「情報検索」講座図書館の理論と実際5、雄山閣、1991 .  |      |                                   |      |                                      |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 2 回程度のレポートの提出、演習の発表および出席を加味して評価する。  |      |                                   |      |                                      |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | MS-Windows95、MS-Word、およびMS-Excelの取り扱いに慣れていること。  |      |                                   |      |                                      |

1. 情報検索システムとは(1)  
情報、広義と狭義
2. 情報検索システムとは(2)  
蓄積段階と検索段階
3. 実習(1)  
OPACの実習
4. 蓄積段階(1)  
蓄積段階の処理項目、一次資料と二次資料、情報の入手、主題分析
5. 蓄積段階(2)  
検索キー、索引、データベース
6. 検索段階(1)  
検索段階の処理項目、情報要求、検索質問、検索式
7. 実習(2)  
Internetのサーチエンジンの利用
8. 検索段階(2)  
シソーラス等の検索辞書
9. 実習(3)  
JOIS等商用データベースの利用
10. 検索段階(2)  
検索結果、検索の評価、再現率と適合率
11. 演習(1)  
課題による演習と発表
12. 演習(2)  
課題による演習と発表

|       |                                 |      |       |
|-------|---------------------------------|------|-------|
| 科 目 名 | 情報検索演習・資料特論<br>(経済学部「情報検索論」と合併) | 担当者名 | 福 田 求 |
|-------|---------------------------------|------|-------|

|                       |   |         |  |
|-----------------------|---|---------|--|
| 講 義 の 目 標             | 必要な情報を効果的に選択，入手する行為としての「情報検索」について理解を深める。特に，コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を，解説および実習を通して体得する。  |         |  |
| 講 義 概 要               | 本講義ではまず，情報検索に関する基礎的な概念について解説し，情報検索を取り巻くシステムの仕組みを概観する。そしてその知識を踏まえた上で，実際の情報検索技術に慣れ，習熟するために，CD-ROMによる情報検索の実習を行う。次に，情報検索のサービスについて説明し，さらにオンラインの情報検索サービスの実際の利用を通して，情報検索の理解を深める。そして最後に，新たな情報検索の場としてインターネットを取り上げ，これについても実習を行う。実習では可能なかぎり，受講者が今後の調査／研究活動で利用できるような情報源(CD-ROM，オンライン)を紹介する。 |         |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 使用しない。  |  |
|                       | 参考文献  | 適宜指示する。 |  |
| 評 価 方 法               | 前期および講義の定期試験。これに平常点(実習への参加態度等)を加味する。  |         |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 実習の形式(個人で行うかグループ単位で行うか等)は，学内で利用できる機材と受講者数とのバランスを見て決定する。よって受講者数を確認したいので第1回の授業には「必ず」出席すること。   |         |  |

|                            |   |
|----------------------------|---|
| 年<br>間<br>授<br>業<br>計<br>画 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション：受講者の確認・決定。年間予定，授業方法等の注意事項について説明。</li> <li>2. 情報検索概論(1)：情報検索の定義，種類，歴史について解説。</li> <li>3. 情報検索概論(2)：データベースの定義，意義，構成要素について解説。</li> <li>4. 情報検索概論(3)：データベースの種類，歴史について解説。</li> <li>5. 情報検索概論(4)：第7回以降の実習で用いる索引言語について解説。</li> <li>6. 情報検索概論(5)：第7回以降の実習で用いる検索式について解説。</li> <li>7. CD-ROM検索(1)：実習</li> <li>8. CD-ROM検索(2)：実習</li> <li>9. CD-ROM検索(3)：実習</li> <li>10. CD-ROM検索(4)：実習</li> <li>11. CD-ROM検索(5)：実習</li> <li>12. 前期講義のまとめ</li> <li>13. 情報検索サービス(1)：情報検索サービスの定義，意義，歴史，種類について解説。</li> <li>14. 情報検索サービス(2)：情報検索サービスの利用について解説。</li> <li>15. オンライン検索(1)：実習</li> <li>16. オンライン検索(2)：実習</li> <li>17. オンライン検索(3)：実習</li> <li>18. オンライン検索(4)：実習</li> <li>19. 新しい情報検索の動向：インターネットなど新たな情報検索の領域を紹介。</li> <li>20. インターネットによる情報検索(1)：実習</li> <li>21. インターネットによる情報検索(2)：実習</li> <li>22. インターネットによる情報検索(3)：実習</li> <li>23. インターネットによる情報検索(4)：実習</li> <li>24. まとめ</li> </ol> |
|----------------------------|---|

|       |            |      |         |
|-------|------------|------|---------|
| 科 目 名 | 図書館資料論（後期） | 担当者名 | 浅 岡 邦 雄 |
|-------|------------|------|---------|

|   |  |             |  |
|---|--|-------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 資料は図書館を構成する主要素のひとつであり、また「資料をよく知ること」が図書館員の専門性としての一要件である。この科目では、図書館で扱う各資料についての基本的知識を修得するとともに、図書館における蔵書形成の意義や問題点について考察する。 |             |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 図書館資料の種別と特性、それらがいかに生産され図書館に収集されるのかという基礎的知識をまず解説する。そのうえで、図書館が蔵書形成するうえでの方針や問題点、およびその管理と方策などにつき、適宜現物や事例をあげながら講義する。        |             |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト   | 使用しない。      |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献   | 講義のなかで紹介する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 期末のレポートと期間中2回程度提出するレポートにより評価をおこなう。   |             |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 出版物や情報に対する知的好奇心の発揮を期待する。   |             |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. オリエンテーション、授業の進め方など
2. 図書館資料の種別とその特性
3. 出版物の生産・流通と図書館 図書
4. 出版物の生産・流通と図書館 逐次刊行物
5. 出版物の生産・流通と図書館 特殊資料
6. 非印刷資料と図書館
7. 蔵書形成 公共図書館
8. 蔵書形成 大学図書館
9. 資料の選択 図書選択論の変遷
10. 資料の選択 資料選択のための情報源
11. 分担収集
12. 資料管理とその方策

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 専門資料論（前期） | 担当者名 | 松 山 巖 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |  |       |  |
|---|--|-------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 人文科学、社会科学、自然科学、医学、工学などの各学問分野の専門文献や、行政資料、郷土資料などの資料を、適確かつ迅速に入手するために必要な知識を学ぶ。   |       |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>学術資料を中心とする専門資料については、なじみのない学生も多いことと思うので、基本的な知識から始めたい。まず広大な種々の学問の世界を概観し、知識がどのように構造化されているかをみる。その上で、学問分野をどのように分けるか；各学問分野の研究活動のスタイルにはどのような特徴があるか；学術情報が生まれ、流通し、利用され、変化していくプロセスはどうなっているか；各分野ごとの資料の種類、特性、入手方法にはどのような違いがあるか；各情報にアクセスするために2次資料をどのように活用するか、などについてみていきたい。</p> |       |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 特になし。 |  |
|   | 参考文献   |       |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 出席及びレポート。  |       |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |  |       |  |

1. イントロダクション  
授業の進め方 参考文献
2. 専門資料とは
3. 研究者の研究活動
4. 学術資料の生成・流通・利用
5. 学術情報にアクセスする手段
6. 学問を分ける
7. 知識の構造と資料の特性 人文科学
8. 社会科学
9. 自然科学
10. 医学・工学
11. 行政資料
12. 郷土資料

|       |            |      |       |
|-------|------------|------|-------|
| 科 目 名 | 資料組織概説（前期） | 担当者名 | 松 山 巖 |
|-------|------------|------|-------|

|                       |   |  |  |
|-----------------------|---|--|--|
| 講 義 の 目 標             | 資料の組織化の必要性、歴史、各種の規則とその背景など、実際に業務を行う上で知っておくべき理論を学ぶ。  |  |  |
| 講 義 概 要               | 図書館の資料を利用しやすくするためには、資料の組織化と呼ばれる作業が必要です。この作業の柱となるのは、資料を主題内容によって分類して排列することと、タイトルや著者名など種々の手がかりから検索できるように目録を作成することです。この授業では、前半で目録、後半では分類を扱います。基本的に講義形式で行いますが、受講生の「なぜ」を大切にして進めていきたいと考えています。従って、質問大歓迎です。充実した、かつ楽しい授業をめざしたいと考えていますので、内容はどうしてもよくて単位さえ取ればよいという気持ちの人はこちらからお断りします。 |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 特に使用しません。  |  |
|                       | 参考文献  | 志務田務・高鷲忠美『資料組織法』第3版（第一法規）<br>堀込静香ほか『パソコン演習資料組織』（日本図書館協会）<br>その他、初回の講義時に指示。 |  |
| 評 価 方 法               | 出席点、授業への参加度、定期試験を総合的に加味して行う。  |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 実際に図書館で、目録を検索した経験があることが望ましいので、もしなければ(あっても)大学や地元の図書館を利用して経験を積むようにしてください。   |  |  |

1. オリエンテーション 授業の進め方 文献紹介
2. 図書館における資料の流れと組織化  
目録とは 基本的な用語の説明
3. 目録の歴史  
メディアの歴史と目録形態の歴史(冊子体、カード、コンピュータ目録等)
4. 図書館の書誌的構成 書誌記述に必要な分析
5. 目録規則とは  
概要 歴史 NCR(日本目録規則) AACR(英米目録規則)
6. アクセスポイント  
標目と排列 典拠コントロール 標目指示
7. 目録のコンピュータ化  
共同目録作業 標準化 書誌ユーティリティ
8. 分類法の概説  
分類の意義 分類・件名・キーワード
9. 区分と体系化  
区分の原則(排他性、網羅性) 体系化(構造、排列、記号化)
10. 分類法の種類と歴史  
NDC(日本十進分類法)
11. 主題分析  
キーワードと主題 件名標目表 シソーラス
12. まとめ

|       |            |      |       |
|-------|------------|------|-------|
| 科 目 名 | 資料組織演習（後期） | 担当者名 | 松 山 巖 |
|-------|------------|------|-------|

|                       |   |           |  |
|-----------------------|---|-----------|--|
| 講 義 の 目 標             | 資料組織概説で修得した知識に基づき、実際の組織化の方法を身につけるための演習を行う。  |           |  |
| 講 義 概 要               | 前半は目録の作成、後半は分類作業。本来なら実物の資料（図書など）を用いて行いたいところですが、なかなかそうもいかないで、標題紙や奥付、目次などを抜き出したプリントを配布して行うことになるでしょう。目録、分類とも一定のルール（目録規則および分類規則）に基づいて行うので、数多くの規則が出てきますが、単なる棒暗記にならないよう心がけ、ルールの裏にある歴史・事情など、規則の存在理由をできるだけ考えながら進めていきます。毎回、演習をしていくうちに、書店で本を手にしながらふと「サブタイトルはどこからかな」「主題は何だろう」などとつづやいてしまうようになったら、しめたものです。 |           |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | なし。       |  |
|                       | 参 考 文 献   | 授業で指示します。 |  |
| 評 価 方 法               | 出席、授業への参加度、定期試験により総合的に評価します。  |           |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 規則だけ知っていても、資料の組織化はできません。知識の宇宙に向かって心を開いておくことと、好奇心と常識が大切です。また、演習ですので、積み重ねも大切です。欠かさず出席しましょう。   |           |  |

1. オリエンテーション  
授業の進め方 文献紹介 書誌情報とは
2. 書誌記述  
タイトルと責任表示
3. 書誌記述  
版・出版・形態・シリーズに関する事項
4. アクセスポイント  
標目 標目指示 排列
5. 目録演習
6. 目録演習
7. 目録演習
8. 分類法  
NDC の原理、構成 本表と相関索引の使い方
9. 分類法  
補助表の使い方
10. 分類演習
11. 件名目録  
基本件名標目表 ( BSH ) の使い方
12. 総合演習

|       |                     |      |       |
|-------|---------------------|------|-------|
| 科 目 名 | 児童サービス論（前期）(後期)半期完結 | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|---------------------|------|-------|

|                       |   |                              |  |
|-----------------------|---|------------------------------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>基本的には、文化的に充実した児童期を過すことで、将来のよき図書館利用者を育成することを目的に公共図書館における児童サービスを中心に述べる。また、児童の様々な読書・文化活動も行われているが、それらについて理解も深める。</p> |                              |  |
| 講 義 概 要               | <p>児童サービスの発達、児童文学を中心とした児童資料、児童サービスの具体的な活動内容、様々な児童文化活動について述べる。</p>   |                              |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | 堀川 照代『児童サービス論』 日本図書館協会、1998年 |  |
|                       | 参 考 文 献   | 適宜指示                         |  |
| 評 価 方 法               | 学年末試験   |                              |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | 現代の子どもをめぐる問題状況に関心をもつこと  |                              |  |

1. 児童サービスとは
2. 児童資料の特色と選
3. 児童資料の形成と整理
4. 児童サービスの内容
5. 児童サービスの技法
6. 児童サービスを支えるもの
7. ヤングアダルトの問題
8. 児童サービスの充実のために - 連携と協力
9. まとめ

|       |              |      |         |
|-------|--------------|------|---------|
| 科 目 名 | 図書及び図書館史（後期） | 担当者名 | 稲 村 徹 元 |
|-------|--------------|------|---------|

|                       |  |  |  |
|-----------------------|--|--|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>人類文化のあゆみを理解するのに欠かせぬ“文字から印刷への発展”を知り、その蓄積の場としての 図書館 の歴史を学ぶ。その中で、情報のつくり手、利用者とのかわり、社会的影響などを知り、印刷＝出版物の伝播流布が果す歴史的役割を考えたい。もの（図書）とひと（図書館員、読者＝利用者）の關係に留意しつつ、図書館の果す社会的役割をとらえるようにつとめる。</p>   |  |  |
| 講 義 概 要               | <p>単に、東西の古代から近・現代へと、文庫・図書館の年代史的知識をたどるだけではなく、“文字の発生・記録の誕生”、“紙など情報伝達手段のあゆみ”も考える。学芸・思想上の名著、大出版事業の伸展をたどりながら、それらを後世へと伝存するのに努めた施設（図書館）がいかに限られた階層から、近代的市民社会の共有財産となって来たか。近・現代の国家がどのようにして自国の“文化財の保存・蓄積”につとめたか、それらが今日の生涯学習施設へと伸展するのにとり組んだ先達司書像をも知るように学ぶ。</p> |  |  |
| 使 用 教 材               | テキスト   | <p>教科書は特定しない。できるだけ各回の授業に用意するプリントと、供覧につとめる資料、図版に親しむ。</p>                  |  |
|                       | 参 考 文 献  | <p>「図書館情報学入門」藤野幸雄〔ほか〕共著 有斐閣 1997 230P 1,700円<br/>特に第2章図書館の歴史 PP19-52</p> |  |
| 評 価 方 法               | <p>期末試験（レポートまたは筆記試験）</p>   |  |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>授業時配布のプリントおよび提示する参考文献（図書）に留意し、個々の歴史事象だけでなく、その時代のながれをよくとらえるようつとめる。</p>   |  |  |

1. 文字文化の発生、記録の誕生、紙など情報伝達用具のあゆみ
2. 情報の蓄積、羊皮紙 パピルス紙への進化 / 古代図書館の出現
3. 活字文化の誕生、出版の普及 / 主に西欧世界での図書館の伸展
4. 学芸思想の解放 出版産業の伝播 / 市民社会の形成と読書
5. 東洋・日本における印刷・出版 / “文庫”・藩校などのあゆみ
6. 産業の伸展・大衆文化と図書館の役割
7. 近世から近代におよぶ日本出版・販売システムの特徴
8. 近代国家での 文庫 から 図書館 へ
9. 大図書館像の形成へ・“国立図書館”とは何か
10. 日本近代社会における図書館像
11. 民主主義社会の形成から生涯学習の場へ
12. 内外図書館人の群像から
13. 情報化社会のにない手（書誌活動先馳者のあゆみ）

|       |                |      |         |
|-------|----------------|------|---------|
| 科 目 名 | コミュニケーション論（前期） | 担当者名 | 福 島 哲 夫 |
|-------|----------------|------|---------|

|   |  |            |  |
|---|--|------------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 対人コミュニケーションの様々なあり方について考え、場面や相手に応じてよりふさわしいコミュニケーションが実際にとれる技量と人格を身につける。        |            |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 日常の対人コミュニケーションをいくつかの視点から分類・分析し、その代表的ないくつかを実際により円滑に実行できるよう豊富な具体例と実習を通じて学んでいく。 |            |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | なし         |  |
|   | 参考文献   | 講義の中で紹介する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 出席と課題提出を重んじる。また、実習の出来も加算される。   |            |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 積極的な参加を切望する。   |            |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. 対人コミュニケーションと対人援助行動のいくつかのあり方について講義
2. 対人コミュニケーションのいくつかの実例をもとに考える。
3. 対人援助行動のいくつかの実例をもとに考える。
4. 教室内で対人コミュニケーションの実習をし、それをもとに考える
5. 同上
6. 同上
7. 出席者が教室外でとった対人コミュニケーションをその記録をもとに分析し考える。
8. 同上
9. 同上
10. 同上
11. 同上
12. 同上



1. 「コミュニケーション」の概念を理解する。
2. 「コミュニケーション」と「教育」の関係を理解する。
3. 「メディア」の概念を理解し、「メッセージ」との関係を知る。
4. 視聴覚教育の源流、概念、その歴史の展開を知る。
5. 視聴覚コミュニケーションを理解する。
6. 視聴覚教育の研究方法を理解する。
7. 日常生活とメディアの関係を理解する。
8. 言語と非言語の機能の相違を説明する。
9. 生涯学習の意義と・必要性とメディアとの関係を理解する。
10. メディアの特性について学ぶ。
11. OHPの作成を通して教育への応用を試みる。
12. メディアの操作と利用法を学ぶ（電子メール等）

|       |           |      |       |
|-------|-----------|------|-------|
| 科 目 名 | 図書館特論（前期） | 担当者名 | 福 田 求 |
|-------|-----------|------|-------|

|   |   |         |  |
|---|---|---------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | <p>各種図書館において、インターネットをはじめとするネットワーク上の情報サービスが始められている。このサービスの数は増えつつあり、また内容的にも高度なものになってきている。今後、図書館員あるいは何らかの情報サービスに携わる者には、ネットワーク情報資源を構築したり利用したりする能力が当然求められていくことになるだろう。本講義ではインターネット上の情報資源の中でも特にWWWに注目し、これについて受講者が理解を深められるようにしたい。</p> |         |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | <p>講義前半ではインターネット、WWW、HTML、(URLを含む)URI等の基本的な概念について解説する。また、WWWによる情報資源の具体的な構築方法も紹介しつつ、講義後半においては、受講者各自の選んだテーマにしたがって、Webページの作成の実習を行う。</p>  |         |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テ<br>キ<br>ス<br>ト  | 指定しない。  |  |
|   | 参<br>考<br>文<br>献  | 適宜指示する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 作成されたWebページとレポートの評価。  |         |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | コンピュータの基本的操作（キーボード操作、保存やコピーといったファイル操作等）を習得していること。受講者確認のため第1回の授業には「必ず」出席すること。  |         |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. オリエンテーション：受講者の確認・決定。年間予定、授業方法等の注意事項について説明。
2. インターネット、WWWの仕組み
3. インターネット上の情報資源・サービス（電子図書館、検索エンジン等）
4. インターネット上の諸問題（情報倫理、著作権等）
5. Webページの作成：内容（テーマ）と形式（Webページの構成）の決定
6. Webページの作成：テキスト
7. Webページの作成：静止画像
8. Webページの作成：音声
9. Webページの作成：動画
10. Webページの作成：CGI他
11. Webページの作成：受講者による相互批評等
12. まとめ

|       |                |      |       |
|-------|----------------|------|-------|
| 科 目 名 | 学校経営と学校図書館（後期） | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|----------------|------|-------|

|                       |   |      |  |
|-----------------------|---|------|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>学校図書館の理念と教育的意義とを、生涯学習体系下にあるものとしてとらえ、「生きる力」「自己教育力」の形成という観点から、それらを述べる。学校図書館は、児童・生徒という著しく発達する時期にある存在を対象とする学校に付設されるものであるから、その点に留意し、学校経営と教育行財政との関連性において、それを述べる。</p> |      |  |
| 講 義 概 要               | <p>生涯学習体系下での学校のあり方、教育課程の検討、そして、その実現のため各種資料を備えた学習センターとしての図書館のあり方を、司書教諭の役割に焦点をあててみていく。</p>  |      |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | なし   |  |
|                       | 参 考 文 献   | 適宜指示 |  |
| 評 価 方 法               | 期末試験  |      |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど |   |      |  |

1. 生涯学習体系下の学校のあり方
2. 教育課程の問題 - 「生きる力」・「自己教育力」の形成
3. 学校での教育・学習活動を支える図書館のあり方
4. 学校図書館の担い手としての司書教諭の役割と活動
5. 学校図書館を充実させる手立て - 他諸機関との連携・協力
6. 学校図書館をめぐる教育行財政
7. まとめ

|       |                  |      |       |
|-------|------------------|------|-------|
| 科 目 名 | 学校図書館メディアの構成（前期） | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|------------------|------|-------|

|                       |   |   |  |
|-----------------------|---|---|--|
| 講 義 の 目 標             | <p>学校図書館の質は、その所蔵するメディアの質と量、そしてその整理状況によって決まる。本講義では、それらのメディアの種類と特質、その選択による構成、そして、いつでも利用できるような態勢にしていくことについて述べる。いわゆるブック・オンリーではなく、各種のメディアについても眼を向けていく。</p> |   |  |
| 講 義 概 要               | <p>まず、学校図書館が所蔵すべき各種資料について、ついでその収集ならび整理の仕方について実践的な作業を含めて指導する。</p>  |   |  |
| 使 用 教 材               | テキスト  | なし  |  |
|                       | 参 考 文 献   | <p>L . F . ファーゴ・阪本一郎他訳『学校の図書館』 牧書房 昭和32年<br/>適宜指示</p> |  |
| 評 価 方 法               | <p>期末試験ならび実技作業の成績</p>   |   |  |
| 受 講 者 に 対 す る 要 望 な ど | <p>実務的なことを伴うことから欠席しないこと</p>   |   |  |

1. 学校図書館のメディアの内容(1) 図書資料
2. 学校図書館のメディアの内容(2) 逐次刊行物
3. 学校図書館のメディアの内容(3) 視聴覚資料、その他
4. 選択と入手
5. 整理(1) 分類作業
6. 整理(2) 目録作成
7. 資料の配置
8. まとめ

|       |                |      |       |
|-------|----------------|------|-------|
| 科 目 名 | 学習指導と学校図書館（後期） | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|----------------|------|-------|

|   |   |      |  |
|---|---|------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 生涯学習体系下の主体形成を目指した教育課程を活かした学校図書館利用の授業展開、児童・生徒の自主的な学習活動を支えるレファレンス・サービス、教員の充実した授業展開のための各種資料の提供などについて述べる。 |      |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 児童・生徒の学習実態の把握、学習指導要領の理解などの上に、教員の授業展開のための各種資料の提供、学校図書館利用授業の実施、児童・生徒へのレファレンス・サービスの実施その他について述べる。         |      |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト  | なし   |  |
|   | 参考文献  | 適宜指示 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 期末試験  |      |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 自分が司書教諭であったとしたら、どうするかを常に考える   |      |  |

1. 学校での学習指導の実態を知る  
    「わかる」ということ
2. 学習指導要領についての理解
3. 学習指導要領を具体化する筋道
4. 「わかる」授業のための資料の提供 - 教員の学習指導計画に即して
5. 児童・生徒の「わかる」学習指導としての図書館利用授業
6. 児童・生徒の自主的に「わかる」学習活動への援助 - レファレンス・サービス
7. その他、児童・生徒の学習活動をめぐる問題
8. まとめ

|       |               |      |       |
|-------|---------------|------|-------|
| 科 目 名 | 読書と豊かな人間性（前期） | 担当者名 | 小 川 剛 |
|-------|---------------|------|-------|

|   |  |      |  |
|---|--|------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 人間の特性としては、記号としての言葉・文字を活用することがあげられる。本講義では、それにかかわる能力 - 言葉・文字を駆使できる能力・リテラシーの意義と役割、その陶冶を通しての豊かな人間性の形成について述べる。  |      |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | 人間は言葉・文字によって示されるもの - 観念・概念など - によって思考・推理・演繹・帰納などを行ない知性・理性を磨き、また、言葉・文字によって示される文学的表現などによって、豊かな感情を育む。また、日常生活は言葉・文字によるコミュニケーションによって成り立っている。これらを総合的にとらえて、豊かな人間性の形成を述べる。 |      |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | なし   |  |
|   | 参考文献   | 適宜指示 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | 期末試験   |      |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど |  |      |  |

1. 人間であることと言語・文学
2. 言語・文学の意義と役割 - コミュニケーションの手段
3. リタラシーの習得 - 文化伝達的手段として
4. 読むこと、その一 - 事実の確認、調べること、考えること
5. 読むこと、その二 - 感情の受容
6. 書くこと - 生活綴方・生活記録・自分史
7. 生きることと書くこと - 人間形成の一環として
8. まとめ

|       |               |      |       |
|-------|---------------|------|-------|
| 科 目 名 | 情報メディアの活用（後期） | 担当者名 | 福 田 求 |
|-------|---------------|------|-------|

|   |  |         |  |
|---|--|---------|--|
| 講<br>義<br>の<br>目<br>標                               | 学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る。  |         |  |
| 講<br>義<br>概<br>要                                    | まず、現在までの情報メディアの発達と変化を検討することで、現代社会が高度情報社会であることを確認し、その社会の中でどのように人間が位置づけられるのかを講じる。また、各種情報メディアの特性について概観した後、学校教育の目的や状況に応じてどのようなメディアを選択すべきかも考察する。次に、視聴覚メディア、教育用ソフトウェア、データベース、インターネットといった各ツールごとにその活用方法について具体的に見ていく。そして最後に学校図書館メディアと著作権の関わりを論じる。 |         |  |
| 使<br>用<br>教<br>材                                    | テキスト   | 指定しない。  |  |
|   | 参考文献   | 適宜指示する。 |  |
| 評<br>価<br>方<br>法                                    | レポート / 学期末試験。  |         |  |
| 受<br>講<br>者<br>に<br>対<br>す<br>る<br>要<br>望<br>な<br>ど | 受講者確認のため第1回の授業には「必ず」出席すること。  |         |  |

年  
間  
授  
業  
計  
画

1. オリエンテーション：受講者の確認・決定。年間予定、授業方法等の注意事項について説明。
2. 高度情報社会と人間
3. 情報メディアの特性と選択
4. 視聴覚メディアの活用
5. 学校におけるコンピュータの活用
6. 教育用ソフトウェアの活用
7. データベースと情報検索：その1
8. データベースと情報検索：その2
9. インターネットによる情報検索と発信：その1
10. インターネットによる情報検索と発信：その2
11. 学校図書館メディアと著作権
12. まとめ

